始

318
156

# 社會學講義案

（第一部）

戸田貞三著

東京　弘文堂發兌　京都

特234
515

帝國圖書館藏

# 社會學講義案

（第一部）

戸田貞三著

内閣文庫

東京　弘文堂書房　京都

# 社會學講義案

## (第一部)

緒言。

コントの社會學,

コント以後の社會學,

ジンメルの社會學。

ジンメル以後の社會學。

京都帝國大學圖書館藏

# 緒　　言

社會學は社會に關する學問である。人間の社會生活を取扱ふ科學には種々樣々のものがあるが、社會學は他の科學と異つた特有の觀點よりして社會生活を分析し、かく分析せられたる社會生活の一定內容に就き、學的取扱ひをなさんとするものである。それは社會生活を特定の方面に抽象して茲に普遍的概念構成をなさんとする科學である。

かゝる意味に於て社會生活に關する普遍的概念を構成し、茲に一つの知識體系を樹立せんとする企ては種々なる人々によつて試みられたのであるが、それに就き、社會學と云ふ名稱を始めて用ゐた者は、拾八世紀の終りに佛蘭西に生れたコント (A. Comte) である。

コントは一八三〇—四二年の拾貳ヶ年に其大著『實證哲學大系』六卷を出版したのであるが、主として第四卷以下に彼の社會學を論述し、茲に始めて社會學と云ふ名を持つた學問を組織立てた。

勿論コント以前にあつても、社會生活に關して普遍的概念を構成せんとした者は可なり多くあり、又コントの主張による社會學の內容と多少相似たる內容を持つた學問を樹立せんと試みた學者もあつた。人間生活は大多數の場合に於て常に社會生活を通じて行はれ、社會生活を離れた人間生活は事實上殆んどなく、社會生活程人間生

活を強く動かして居るものはない。從つて此人間生活に重要な關係を持つ社會生活に就いて、之を理論的に考察せんとする企ては可なり古い時代よりあつたと思はれる。卽ち社會生活に關する學的攻究は、早くから人々の知的要求の重要なる標的の一つとなつて居たものと考へられる。此點に關して米國の最も代表的なる社會學者ギデングス (F. Giddings) は、其著 Principles of Sociology に於て、社會に關する確實なる知識は最近の研究によつて得られたものであるが、併し生命現象を除いては、社會現象程人々の構想を強く且つ自由に動かしたものはない。社會生活に就いての記述と理論とに關してはあらゆる想像が加へられ、あらゆる主張が試みられて居る。社會的事實の科學的考察及び分類、並びに其普遍化的取扱ひは、既にプラトーの「共和篇」及び「法制篇」中にあり、又アリストートルの「政治篇」中にも見出される云々と述べ、其後中世並びに近世の多くの學者によつて、斷片的ながら社會生活の考察が試みられ、遂に十九世紀に入つて人間結合及び社會組織を完全に記述し、之を具體的全體に於て理解せんとする科學的方法が、組織的に用ゐられる樣になつたと述べて居る。又獨逸の現代社會學界に重きをなして居るフキーヤカント (A. Vierkandt) も其著 Gesellschaftslehre に於て、形式社會學の樹立を主張し、形式社會學は二つの重要なる研究問題を持つて居るが、此等の問題は何れもコントによつて始めて唱へられた

社會學と云ふ名稱よりは遙に古い歴史を持つて居ると述べて居る。彼の云ふ所の二つの問題とは、一つは社會に獨特なる力如何と云ふ事であり、他は社會は自然的構成體であるか、人爲的構成體であるかと云ふ問題である。彼は第一の問題に就いては既に近世啓蒙時代に於て、ホッブス及びグローチウス等によつて社會學的研究が始められて居ると主張し、第二の問題に就いては、所謂個人主義と集合主義との對立の形に於て、古くから攻究せられて居ると述べて居る。尙又社會學の創設者であると云はれて居るコント自身も、彼の思想上の先驅者としてアリストートル、モンテスキユー、コンドルセー等を擧げ、彼の主張する社會學の研究が、彼に始つたのではない事を告げて居る。

此如く社會學の研究問題となる所のものは、餘程以前より種々なる學者思想家によつて考察されつゝあつたのであるが、併しそれが始めて學として組織立てられ、一つの知識體系としてあらはれる樣になつたのは、コントの『實證哲學』出版以來の事である。それ故に通常社會學はコントによつて建設せられた學問であり、コントの主張した社會學が社會學の嚆矢であると云はれる。

コントは社會學の創設者である。社會學說史上に於ける彼の功績には偉大なるものがある。併しながらコントによつて說かれた社會學が今日も尙同じ樣に說かれて居るのではない。彼の主張した社會

學の體系と問題とが其まゝ今日の社會學の內容をなして居るのではない。『實證哲學大系』が出版されて以來、未だ百年の日月は經過しないのであるが、此間に於て同一の名稱の下に說かれる社會學の內に、其學的體系並びに中心問題を異にするものが、頗る多くあらはれる樣になつた。所謂社會學の學派の內には、生物學派と稱せられるもの、心理學派と稱せられるもの、綜合科學的社會學と云はれるもの、特殊科學的社會學と云はれるもの、社會構成體の機構を說かんとするもの、社會の變遷を進化論的に說明せんとするもの等、種々樣々のものがある。多くの社會學書に於て說かれる所は千差萬別であり、社會學者間に判然たる歸一點がない。それ故に社會學者にあらざる者の內には、社會學の體系が多種多樣であり、社會學者間に歸一點なき點を抽へて、社會學は未だ科學として充分確かに成立したものでないと非難し、科學としての社會學の存立を否定せんとする者さへある。

併しながら、特定の科學の體系及び問題が學者によつて異ると云ふ事は、必ずしも社會學に於てのみ觀られる事ではない。經濟學、宗敎學又は道德學等の如き、文化的所產を取扱ふ諸科學は云ふ迄もなく、物理學や化學の如き自然を取扱ふ科學に於ても、學者によつて其科學の體系及び問題は多少異つて居る。それ故に特定科學の體系及び問題が、之を說く著者によつて異るが故に、其科學は科學と

しての存立が許されぬと云ふ事は出來ぬ。何れの科學も其内に尙多く研究の餘地を存する限り、之を研究する者により、多少其體系及び問題を異にする場合あるのは止むを得ない。ある科學の體系及び問題が一定のものとなり、固定化するは、其科學が完成し、最早何れの方面からも研究せらるべき餘地なき頂點に達したる場合丈である。かゝる頂點に到達しない限り、科學は之を說く者によつて多少觀られる所を異にするのは當然である。只だ社會學の場合にあつては、此學の名稱の下に於て說かれる所が著者によつて餘りに强く異つて居り、且つ其差異の種類が餘りに多い。それ故に他者から觀れば、社會學は如何なる事を中心として研究するものであるかに就いて、多少疑ひを生ずる場合があり得る。社會學に於ける此體系及び問題の多樣なる事につき、獨逸のフキーヤカントは前に述べた著述の中に、社會學の傾向六種を上げ、又米國のウオード(Lester Ward)は其大著 Pure Sociology の中に、十二種の社會學を數へ、更に其上に、此等十二種の社會學の何れとも異る一つの學、卽ち人類文化(Human achievement) に關する學を彼自身の主張する社會學として上げて居る。

社會學の傾向には此如く多くの種類のものが數へられるのであるが、社會學の傾向の此雜多性は、一つには社會學が一個の知識體系として組織立てられてより日尙ほ淺く、其學に盛らるべき研究問題

が如何に取扱はるべきかに關して、諸社會學者間に見解の差ある事と、二つには社會と云ふ名稱が通常極めて不明瞭に用ゐられる爲、社會學の取扱ふ社會が如何なる生活方面に限定せらるべきかに關して、種々の論爭ある事とに歸着する。卽ち社會學の問題を如何に取扱ふべきかと云ふ研究方法の確定と、社會學に固有なる事象を如何に限定すべきかと云ふ研究對象の確立とに關して、社會學者間に種々なる見解並びに態度の差ある故、學としての社會學が樣々の傾向を帶びてあらはれるのである。社會學を以て社會生活の指導原理を說くものであるとか、社會事實を記述するものであるとか、又は人々の社會關係の普遍的法則を攻究するものであるとか等の如き種々の主張は、社會學研究方法上の態度の差より起る論議であり、又社會學を以て社會生活の包括的全體的關係の說明であるとか、社會進化に關する考察であるとか、社會的制度の攻究であるとか、對人關係に觀られる固有なる性質に關する研究であるとか云ふのは、社會學の研究對象を如何に定むべきかに關する見解の別より生ずる差異である。

社會學の樹立がコントによつて主張せられて以來約半世紀間は、社會學の傾向に餘り多くの差あるものが表れなかつた。此間にあらはれた多くの社會學は、大體に於てコントの社會學と同樣なる傾向にあるものであつた。然るに拾九世紀の終り頃より、從來の傾向と

は異る傾向を持つ社會學が次第に多くあらはれる樣になり、社會學の研究主題となるべきものを如何に定むべきか、又之を如何に取扱ふべきかに關して、次第に多くの論爭を觀る樣になつた。卽ち社會學に固有の研究問題、是れなくして社會の存立が許されぬと云ふべき純社會的なるものを如何に限定すべきか、又此如き純社會的なるものを如何に取扱ふべきかに關して、種々の學說があらはれ、社會學の問題及び體系は多種多樣のものとなつた。

此等多くの社會學の傾向の內、最も著しき特色を持つものとして二つの社會學を見出し得る。一つは社會學の創設者コントによつて述べられる社會學であり、第二は獨逸の社會學界に最も重きをなして居る、ジンメル (G. Simmel) の主張する社會學である。前者は社會學の研究主題を社會的諸現象の復雜なる相關々係による綜合的全體、及び其全體の變遷進動に求め、此全體の構成及び變遷に關する普遍的法則を攻究し、之により將來起るべき社會的變遷の方向を豫測するのを以て、社會學の任務なりとし、後者は社會學の中心問題を社會に最も固有なるもの、卽ち純社會的なるもの——結社形式として心的相互作用——に求め、此純社會的なるものを一定の認識見地に於て確立し、之を論理的に整序し、心理的に說明し、其諸形式の一般的性質を究明するのを以て社會學の任務として居る。一方は現實的社會を機能分化に基く全體的共同なりと考へ、かゝる社會の全體的進化の法則を見出し、其運命を豫測し、社會生活に於ける指

導原理を樹立せんと企てるものであり、他方は現實的社會生活を分析して、社會に特有なるものを一面的に抽象し、現實社會を說明し得る相對的普遍化的概念を構成せんとするものである。

社會學に於ける此等二つの傾向は、社會學創設以來あらはれた諸傾向を區分する重要なる目標であると考へられる。何故ならば現代迄にあらはれた多くの社會學的研究は、此二つの傾向の內何れかの一つにより多く類似した傾向を持つてあらはれて居るからである。多くの社會學は其對象として、社會的諸現象の綜合的全體を捕へんとするか、然らざれば現實的集團生活中、純社會的と考へられるものを分析して把捉せんとするかであり、又其方法に於ては、社會生活の展開を規制する指導原理を求めんとするか、然らざれば社會生活に見出される特有性の傾向律を求めんとするかである。從つて此等社會學はより多くコントの學說に傾くか、然らざればより多くジンメルの所說に類するものである。それ故に社會學の研究に當つては、此等の二つの傾向は最も重要なるものとして攻究せられなくてはならぬ。此等二つの傾向を考察する事は、社會學に於ける最も代表的なる傾向を理解する事となり、從つて他の社會學的諸傾向を理解する上に於ても亦、最も有力なる指針を捕へ得る所以となるであらう。

此講義案に於ては先づ最初に此等二つの社會學の傾向を述べ、次いで現代社會學の主なる問題に就いて攻究する事としたい。

# コントの社會學

コントの小傳。Isidore Auguste Marie François Xavier Comte (1798-1857.) は一七九八年一月十九日佛國 Montpellier に生れた。父は稅務官吏、父母共に王黨にしてカソリック信者であつた。彼は兩親と異り早くから當時の革命的氣風に親しみ、共和主義を奉じ、傳來的の宗敎とは離れて居た。十六歲の時 École Polytéchnique の入學試驗に首席にて合格し、十七歲の時之に入學した。當時此學校には共和主義の傾向强く、時の政府の要求と一致せぬ氣風多かつた爲、彼の入學後間もなく政府は學校を閉鎖した。

一八一六年(十九歲)彼は生計上の困難を免がれる爲パリにて數學の私塾を開き、一八一八年當時最も有力な思想家であり、且つ社會運動家であつたサン・シモン (St. Simon) の門下生となり、一八二四年迄彼に師事した。此間に於て彼はサン・シモンの思想を多く受けつぎ、一八二二年には Plan des Travaux Scientifiques néccéssaires pour Réorganizer la Sociétè と云ふ小冊子を出版した。此小冊子は、彼の全生涯を通じての諸著作の骨子と見做されて居るのであるが、其出版以來サン・シモンとの間に不和を生じ、一八二四年彼は遂に其師の門下を去つた。

一八二六年彼は哲學大系を開講する旨を公にし、二六年五月より

私宅に於て開講した。始め計畫せられたる講義の題目は次の如きものであつた。

序論、數學、天文學、物理學、化學、生物學、社會物理學。

此講義には其當時有名であつた天文學者、數學者、生物學者等も聽講に參加したのであるが、彼は此講義に多大の勢力を傾けたのと、一方家庭生活上の不和と貧困とに苦しめられた爲、遂に健康を害し、三四回目の講義の後一ケ年間休講する事にした。其後一時精神異常に陷つたのであるが、再び健康を回復し、一八二八年より再び講義をつゞけ、一八二九年に之を終つて居る。此講義に於て彼が用ゐた題目『社會物理學』Physique Sociale は『社會學』Sociologie と同一の意味のものである。

此頃パリの École Polytéchnique は再び開校せられ、彼は數學の教師として此所に奉職して居た。彼は是より前述の講義に基き、一八三〇年に Cours de Philosophie Positive の第一卷を出版し、一八四二年迄に此大著六卷を完成した。次いで一八四四年には彼の主張する實證主義の要綱を示す、Discours sur l'Ésprit positif を出版した。當時英國のミル(J. S. Mill)は早くもコントの社會學に着目し、コントと文通し、彼の生計の幾分を助ける意味にて英國の雜誌に投書せん事をすゝめた。

一八四六年頃より彼の思想は次第に變り行き、愛の人生觀を重ん

する樣になつたと云はれて居る。一八五一——五四年の四ケ年間に順次に發表した『實證政治學體系』Système de Politique Positive ou Traite de, Sociologie instituant la Religion de l'Humanité 四卷は、彼の愛の人生觀の製作であると云はれて居る。一八五二年に Catechisme Positiviste を出版し、一八五六年に Système Subjective ou Système Universel des Concéptions propres à l'État Normal de l'Humanitè を第一卷丈出版し、一八五七年九月五日遂に此世を去つた。

コントの學問論。コントは『實證哲學』の最初に、學問研究の目的を論じ、彼の取る所の實證主義の立場に就いて說明を下して居る。彼は學問の目的、特に科學的研究の目的に就いて『豫見せんが爲に知る』Voir Pour Prévoir と云ふ主張を取つて居る。此主張は實行に關係なき學問知識に對して反對すると同時に、確實なる客觀的資材に對する知識なくして、人間生活の展開に關する論議をなさんとする態度にも反對せんとするものである。コントの主張する學問論は、知行合一の巧利主義の立場にあるものであり、それは彼自ら『實證主義』Positivisme と稱する所のものの上に立てられて居る。

實證主義の强い要求は社會改造の原理を捕ふるにあつた。それはマルクス註釋家が社會改造の原理を說くのを以て、學的研究の目的とするのと同樣なる目的を持つものである。社會改造の原理は人々の主觀的想像に基いて樹立せらるべきものでなく、現實的歷史的の

社會的現實態に就いて考察し、眞に社會生活を動かす所の實相を捕へ、確實なる知識に基いて確立せらるべきであると云ふのが、彼の實證主義の主張であつた。此如き實證主義が彼によつて强く主張せられたのは、單に彼の自由なる構想によるのみならず、尙それよりも一層多く、彼を取り圍んで居た當時の佛國の社會狀態に基くものと考へられる。彼が生れたのは佛蘭西革命勃發後未だ拾年を經過しない時である。彼の青年時代は革命後の動亂の爲、佛國の社會的秩序が整はず、佛國民は擧げて其秩序回復を切望して居た時期である。かゝる時代に於て多くの思想家、學者等が、革命後の建設を一定の學的原理の上に置かんとし、社會的秩序を基礎づけるべき法則を學理の上に求めんと試みたのは、何等不思議ではない。コントが師事したサン・シモンの如きは、此時代の要求を實現せんとした人の中、最も著しい者の一人であると觀られる。

サン・シモンはパリの門閥家に生れ、軍隊敎育を受けた人であるが、青年時代にアメリカの獨立軍に參加した程の情熱家であつた。佛國革命が起きたのは彼が三十歲の時である。彼は直接革命には參加して居らぬが、革命後の社會改造に關して學的の根據を求めんとして、種々獨創的の思想を開陳した。彼の考によると、一定の時代、一定の社會には何人も承認して居る所の共同的思想がある。此共同思想は個々人が任意に變動せしむる事を得ないものである。か

ゝる共同思想が如何なるものであるかは、之を實證的科學的に考察する事によつて捕へられるのであり、而して社會改造の原理は此共同思想に基礎づけられねばならぬ。從來物理現象の如き自然現象に就いては、科學的實證的研究が施された爲、それ等の現象に關して普遍的法則が樹立せられた。然るに社會現象に關しては、其研究の方法が神學的又は形而上學的であつたが爲に、其研究者は社會生活の根底に動いて居る所の共同思想を捕へる事が出來ず、普遍的法則を求める事が出來なかつた。而して又社會生活の指導原理、卽ち政治の根底は、それが實證的科學的に樹立せられた普遍的法則に基いて居るのではなく、神學的形而上學的思想に基いて居た爲に、其原理は常に薄弱なるものであり、其原理の上に立てられた政治形態は變動極りなきものであつた。此如き變遷常なき政治形態を改め、眞に人間生活の安定を保ち得る政治の根底を定むる爲には、人間の社會生活現象につき、實證的研究を施し、茲に社會生活の背後に潛む共同思想を求め、之により社會生活を支配する法則を求め、社會改造の確實なる原理を確立しなくてはならぬと云ふのである。卽ち彼は社會現象は自然現象とは異るが、併し自然現象と同樣に客觀的資材に基き、科學的に考察する事が出來、又此如き科學的考察に基いて、社會生活に關する普遍的法則を求める事が出來、而して又此普遍的法則に基いて、社會改造の原理を求める事が出來ると考へたの

である。彼は此如き考に基き、一方には、佛蘭西の歴史を研究して政治組織の基本としての階級對立を唯物史觀的に解說し、社會生活の變動原因を產業形式又は財產に對する人々の態度に求めんとし、又他面に於ては、人々の精神生活の變遷を考察して、人類の精神生活が神學的、形而上學的、及び實證的の三期の進展をなして居る事を主張し、此三期の思想變遷に應じて、社會生活の形式が三段の變化を遂げて居る事を述べて居る。前者は歴史的變遷を物に對する人々の態度に還元して說明し、茲に社會生活變動の普遍的法則を求めんとするものであり、それは此後に起る物的史觀の先驅をなすものである。後者は社會生活の史的變遷を人々の精神生活、卽ち思惟の態度に還元して說明し、社會生活の諸形態、政治の諸形式の普遍的指導原理を、此思想的背景に求めんとするものであり、それは後にコントによつて所謂『三段の法則』として說かれる社會進化論の根元である。

コントの青年時代は革命後の建設時代である。社會改造の原理確立に關する要求の切なる時代である。かゝる時代に生育して彼はサン・シモンの門下に入り、其下に於て前述の如き思想の洗禮を受けたのである。彼の學問の第一步が、社會的秩序(廣義の政治)改造の原理樹立にあつたのは當然である。彼の學問が實證主義と云ふ功利的立場にあつたのは、彼が亦其時代の兒たりし所以を語るものと云ふ

べきか。彼が最も強く主張する所の『豫見せんが爲に知る』と云ふ立場は、當時の時代思潮であつた社會改造の原理の要求と、彼の知的要求との合一化せるものと考へらる。

サン・シモン及び其以前の學者にあつても、人間の集團現象としての政治の研究、又其時間的展開としての歴史の研究に就いて、普遍的法則を求めんとする者は可なり多くあつた。特にサン・シモンは此如き研究が客觀的に確實なる資料に基いて行はれ得べく、又それは他の科學の如く、一つの獨立の科學(Politique Positive)となり得る事を主張した。然るにコントはかゝる思想を受けたる後に於て、人間の集團現象に關する實證的科學 (Physique Sociale; Sociologie) が學問體統 (Hierarchie) の上より當然存立しなくてはならぬ所以を論理的に立證せんとした。前者は實證政治學卽ち社會學が、一つの確實なる科學として研究せられる事を主張したのであるが、後者は社會物理學卽ち社會學が、單に一科學となり得るのみならず、それが學問の體系上に於て是非共科學として存立しなければならぬ所以を論證せんとした。コントの考によると、あらゆる實證的科學は學問系統上一定の配列に置かれるものであり、個々の科學が全然無關係に獨立するものでない。それぞれの科學は一定の論理的秩序を保つものであり、而して社會物理學卽ち社會學は、此論理的秩序の最後に立ち、人間生活の眞の動きを示し、將來繼起すべき運命を豫測せ

んとするものである。此考に於て、彼は諸の實證的科學卽ちあらゆる知識大系を論理的に社會學に結びつけ、而して社會學に社會改造の原理を宿らしめ、かくして彼の所謂『豫知せんが爲の知識』と云ふ知行合一の態度を確立せんとした。卽ち彼は若年の頃から興味を持つて居た數學天文學等の如き知識を始め、物理學化學等も、總て實證的科學として一定の論理的系列に配列し、而して此論理的系列の最後に社會學が存立しなくてならぬ所以を力說し、かくして社會學なる科學の存立を論理的に主張すると共に、此社會學に社會生活の運命を豫測する任務を負はしめ、彼の所謂實證主義の立場を確定せんと企てたのである。

それ故にコントの社會學を觀る爲には、彼の學問體統論を伺ふの必要がある。彼の學問論は社會學なる一科學樹立の論理的基礎であり、社會學の存立に就いて重要なる意義をもつものである。

コントの考によると、學問の分類は、分類せらるべき學問對象の類似性、及び其對象間に存する自然的系列によつて確定せらるべきである。對象間にある自然的系列とは、普遍性の大小に基く對象間の依存關係である。普遍性の大なるものより其小なるものへ到る順序に於て、各々の學問對象は常に前に立つものに依存する關係にある。かく對象間に依存關係ある故に、此等の對象を持つ學問も亦依存關係に立ち、普遍性の大なる對象を持つ科學は、其小なる對象を

持つ科學の論理的前提となる。何故ならば普遍的なるものは然らざるものを常に支配する關係に立つからである。此樣にして對象間に存する依存關係に基いて、學問間に一定の體統關係が確立せられる。卽ち對象間の依存關係が學問の論理的系列を決定し、對象間の性質が學問の位置を定むる事になると云ふのである。

此如き考に基き、彼は科學の對象となつて居るものを、數、天文現象、物理現象、化學現象、生物現象、及び人と人との關係から成る集合現象とに分けた。此等の諸現象中始めの五つの現象は、最後のものに比較すると普遍性大して復雜性の小なるものである。此等普遍性大にして復雜性の小なる現象に就いても、始めは神學的、形而上學的說明が加へられたのであるが、併しこれ等に就いては比較的早くから實證的研究が試みられた。それ故に此等の現象に就いては、確實性に富んだ科學が樹立せられて居る。然るに最後の現象は其復雜性の大なる爲に、之に對して從來は實證的研究方法が用ゐられなかつた。それ故に此現象に關しては、確實性に富んだ科學が樹立せられて居らぬ。併し此最後の現象も、それが如何に復雜性の大なるものであつても、實證的に研究せられ得るものであり、又かく研究せられなくてはならぬものである。而して此復雜なる現象に就いて實證的研究が施される時に於て、茲に社會現象に關する實證的科學(社會物理學又は社會學)が成立するのであると。彼は此如く主

張して、社會現象が他の諸現象と異りて一つの獨立科學の研究對象となる事、及び此現象に就いては、他の科學同樣に實證的研究が施されなくてはならぬ事を述べて、社會學の樹立を提唱したのである。卽ち彼は科學の研究法はすべからく實證的なるべく、而して實證的研究法がそれぞれの對象に向けられる場合に、それぞれの科學が成立すると考へ、諸現象中最も普遍性小にして復雜性の大なる社會現象を學問對象として、之に實證的研究を施す場合に、茲に新たなる科學、社會學が成立すると考へたのである。

コントの考によれば科學は方法の差に基いて成立するのではなく、對象の差によつて樹立せられるものである。それ故に彼の學問論に於ては、科學對象の性質の決定が重要となる。彼は科學對象となるべき諸現象の性質を考察し、諸現象間にある依存關係に基いて此等を論理的に配列し、此等の諸現象を研究する科學を一系列に綜合して、茲に實證哲學が建設されるとした。彼は先づ科學を分類して、一般的原理を攻究する基本的科學と、此基本的科學から派生して、特殊的事象の法則を求めんとする派生的科學とに分け、前者を抽象的、後者を具體的科學と名づけた。此等二種の科學の內、具體的派生的科學の位置は、抽象的基本的科學の體統に應じて定まるものなる故、學問の配列は先づ基本的科學に就いて行はるべきであると考へ、基本的科學を其對象間に存する自然的の依存關係に基い

て、次の如く配列した。

對象に觀出される普遍性の大なるものより其小なるものへ到る順序に於て、卽ち復雜性の小なるものより其大なるものへ到る順序に於て、學問對象を分けると、無機現象は有機現象に先ち、無機現象中天體現象は地上の現象に先ち、地上の現象中物理現象は化學現象に先つ。而して有機現象にあつては個體的現象と個體の集合現象とに分けられるが、前者は後者よりも普遍性大にして、後者の存立は前者の存立に依存するものである。此等各種の現象の配列に應じて此等の現象を實證的に取扱ふ基本的科學の位置が定まるのであるが、此等の科學存立に先ちて、數の存在を許さねばならず、數を取扱ふ科學卽ち數學の存立を認めねばならぬ。此如くして數學、天文學、物理學、化學、生物學、社會學等總て實證的に研究せられる基本的科學の順位が定まり、それ等が論理的に一系列に置かれ、實證哲學の基礎が確定する。此等の科學の位置は、對象の普遍性と復雜性とに應じて定まるものなる故、後のもの程普遍性は限定せられ、前のものは後のものゝ前行條件となる。從つて後のものに關する知識が成立する爲には、前の順位の科學の理解がなくてはならぬ。而して社會學は最も復雜なる現象を取扱ふ科學であり、前のものよりは更に特殊的なる事象を研究するものであるが故に、之を研究する爲には、前の諸現象に關する知識がなくてはならぬと云ふのであ

る。

以上はコントの學問論の大體の主旨であるが、此主張につき注意すべきは、彼が學問の研究を巧利主義に立場に置いた事、此巧利主義の立場に於て彼は一切の科學を實證哲學に綜合せんと企てた事、學問の樹立を對象の差に求め、其研究法としては實證的方法あるのみとした事、事象の復雜性に應じて諸現象を分類し、最も復雜性に富む現象としての社會現象の存立を認め、此現象を實證的に取扱ふ科學として社會學が存立しなくてはならぬとした事等である。彼の學問論は社會學の樹立を論證せんとした意味に於て、社會學說史上興味あるものであるが、總ての學問を巧利主義の立場に置かんとした點、總ての學問を綜合する事に於て實證哲學なるものが成立すると考へた點、科學成立の根據を對象の差にのみ求めんとして居る點、客觀的に認め得る現象と學問對象とを同一視して居る點、對象の求められ得る方面の現象の復雜性の故に、かゝる對象を攻究する學問が復雜なりと考へる點、人間社會現象を取扱ふ基本的科學として只一つ社會學の存立を認め、之を最上位に置いて居る點等に關して、極めて多くの疑問と非難とを招き易くなつて居る。

コントの實證的研究法。コントは前に述べたる如く『豫見せんが爲に知る』と云ふ事を以て學問に對する態度となりとし、此態度を實證主義と稱して居るのであるが、此主義は事實として認められる

もの、經驗され得るものにつき、確實なる知識を得て、之によりて將來起るべき事象を豫測し、人間生活の指導原理を求めんとするものである。事實に關する正確なる知識を以て學問の根據となさんとする考へは、コントに始まつたものでなく、コント自らが學問の研究上に最も大なる影響を受けたと稱するアリストトートルの思想の内にもあらはれ、其後多くの學者によつて主張せられた所である。只だコントは神秘論や不可知論に捕はれる事を恐れ、形而上學的思考に走る事を避けて、先づ事實觀察を主とし、之に基いて將來の宿命を判定すべきであるとして、之を實證的方法と名づけ、科學研究上缺くべからざる方法であると主張したに過ぎない。

彼は學問研究に三段の時期ありと考へ、第一期は事象に關して神學的說明を取る時期、第二期は之を抽象的本質と云ふが如き形而上學的說明に委す時期、第三期は事實觀察によりて現象間に存する諸關係を明にする實證的時期であると說き、此學問研究上の時期の變遷は、人間思想の展開に應じてあらはれるものであるとし、總ての學問は始めは神學的形而上學的に考察せられるが、結局此等は總て實證的に研究せらるべき傾向を持つと云ふ。而して此實證的方法による直接的研究法は、科學對象の普遍性の縮少、復雜性の增大に從つて次第に復雜になると述べて居る。

普遍性の最大なる天文現象を取扱ふ科學には、實證的方法として

只一つの觀察法あるのみであるが、それより普遍性小にして復雜性の大なる物理化學等の事象を取扱ふ科學には、觀察法の外に實驗法が加はり、更にそれよりも復雜なる生物現象の研究に就いては、此等二法の外に比較法が加はり、而して復雜性の最大なる社會現象の研究に就いては、此等の方法の外に、此現象研究に特有なる方法として、歴史法が加はると云ふ。彼は此如く述べて、實證哲學第四卷に社會現象の直接的研究法に就いて詳細なる說明を下して居る。卽ち社會現象の研究方法としての觀察法は、各社會現象相互間にある關係を靜的に考察して其間にある共在連鎖の關係を明にし、更に之を動的に觀察して、各現象繼起の法則を求むる手段となすものであり、更に之に加はる實驗法とは、自然科學に於けるが如く直接實驗の方法を取るのではなく、社會現象の變的なる場合を觀察して、之を支配する法則を一層正確に求めんとする方法であり、尙又比較法とは、何等連絡なくして存する各社會生活狀態の異同を比較して、社會現象を精密に考察せんとするものである。併し此等三種の方法のみを以てしては、尙社會現象を充分正確に攻究する事は出來ぬ。何故ならば社會現象は人間生活の連續的展開に於てあらはれて居り、此連續的歴史的事實を考察する事によつてのみ、之を正確に理解し得られるのである。然るにかゝる理解は以上の如き三種の方法のみによつては、之を求める事が出來ないからである。此如き現象

の研究は人類行爲の連續せる跡方を示す歴史を考察する事によつて、始めてそれが可能となり得る。それ故に社會現象の研究に特有なる方法としては、以上の三種の方法の外に歴史的研究法が取られなくてはならぬと說いて居る。彼は此如く社會現象の研究に歴史法が極めて重要なる所以を力說し、歴史を研究して茲に社會的變動の法則を求め、社會生活進動の方向を尋ね、彼の主張する Voir pour prévoir の要求を滿足せしめんとした。

コントが主張する實證的研究法は、此如く形而上學的思考を加へずして事實觀察をなすべき事を重視し、社會現象の研究法としての實證的方法は、特に歴史的考察を重んずる所にあると云ふのであるが、併し彼の說く所の觀察法以下四種の方法なるものは、要するに觀察を正確にする手段に過ぎない。それは觀察法以外何等特有の方法があるのではない。事實の觀察よりして正確なる知識を得て、將來繼起の事象を豫測すると云ふのであるが、併し此如き考は人間生活が機械論的に、宿命づけられて居ると云ふ思想に基くものではないか。尙又形而上學的思考を加へずして事實を如實に觀察すると云ふのであるが、併し客觀世界を如實に認識する事は不可能であり、吾々の認識はありのまゝの世界を經驗するのではなく、所與の世界を思惟の形式に於て分析抽象した技工的のものではないか。と云ふ樣な種々の疑問を起して來ると、彼の實證主義も次第に其立場が困

難になつて來る。

コントの社會學說。コントの考によると、人類社會の一切の現象は相互に連鎖の關係に立ち、之を個々の部分に分解して存立せしむる事の出來ぬ有機的組織を持つて居る。即ち各部分は全體に依存してのみ存立するものであり、それは全體に於て一つの有機體をなして居る。それは部分相互の共同による連帶關係であり、調和關係であり、一致の關係である。此如き意味に於て述べられた彼の社會概念は、『實證哲學』の後半到る處に見出されるが、特に彼は社會靜學を論述する所(第四卷)に於て、詳細に之を說明して居る。

彼は先づ社會を有機體なりと考へ、社會有機體を最も高等なる有機體であると說いて居る。社會に於ては之を構成する各部分の機能分化最も强く行はれ、各機關相互の結合連絡は最も復雜に行はれて居る。人々が此社會有機體の全組織に就いて考察するならば、此有機體が個體的有機體よりも遙に復雜なる組織を持ち、復雜多樣なる依存關係から成立して居る事を認め得る。即ち此有機體の構成部分は、部分として獨立存在を持ち、それぞれ特有なる性能を持ち、それぞれの特有なる目的衝動に從つて活動しながら、全體としてはある一定の方向に向つて展開しつゝ、其連帶共同の關係を保持して居る。社會に於ては此如き部分の機能分化の數の限りなき增加が許され、而して此機能の分化が增加すればする程、其相互の共同が次第

に必要となり、社會の組織は無限に復雜となる。それ故に社會有機體は如何なる有機體よりも復雜高等なる組織を持つものであると。彼はかく主張して、此個體間の依存關係及び個體相互の機能分化の關係が、動物生活より人類生活に到るに從ひ、人類生活に於ても、家族的集團より非血緣的社會に到るに從つて次第に復雜化すると考へて、次の如き說明を下して居る。

先づ動物生活に就いて觀ると、高等動物中には有意的に集團を構成するものもあるが、併しそれ等は人類の集團に比較すると其組織は極めて簡單である。動物の集團にあつては各個體間の機能分化殆んどなく、集團を形作る各個體は極めて等質的なる動作をなし、相互の共同は極めて單純なる協力たるに過ぎない。

次に此高等動物が形作つた集團よりも稍復雜なる集團は、人類がなす所の家族的集團である。家族なる團體は人類が構成する社會生活の萠芽を含む團體であるが、家族に於ては、之を構成して居る人々の間に機能の分化がある。一家族に於て、夫婦なる構成員は、それぞれ特殊の機能を營み、特殊の作業をなす事によつて相互の依存關係を保ち、又親子なる構成員は、特殊の關係に於て結合し、家族の團體の存續を保障して居る。此樣に、各員間に動作の特殊化、機能の分化ありて、茲に家族なる團體が存立するのである。併しながら、家族に於ける各員の機能分化は、之を充分に確立し得ない事情が

ある。何故ならば、家族の構成員は其數少く、且つ又各家族には一定の家族精神、即ち傳統の要求があるからである。家族の成員の數の小なる事は、成員間の機能分化の增加を防げるものであるが、更に家族にある傳統の要求は、此機能分化の增加を制限するものである。家族精神の要求する所を滿す爲に、各員は其家族に特有なる一定の作業を行ふ必要あり、家族精神の要求する所以上に特殊化した機能を持つ事は、家族員に許され難くなつて居る。即ち家族に於ては子孫を通じて其傳統を傳へ、其職業を傳へ、一定の作業形式を維持する必要がある。此樣な傳統、職業の維持は、親子間に模倣の行はれる事を必要とし、親の持つ所の作業形式とは著しく異る作業形式を取る事を子孫に許さず、親子の間に一定の程度以上の作業分化が起る事を許さない。若し親子間に作業の分化を無制限に許すならば、各家族に固有なる傳統は失はれ、家族精神は減少する恐れがある。それ故に家族に於ては、其成員は各家族の固有の要求に從つて結合を維持し、一定の程度以上に作業形式を分化せしめぬ樣に努める必要がある。此樣な意味に於て、家族は構成員間の機能分化を基本原理として成立して居るものではない。從つてそれは眞に社會とは云はるべきものではなく、社會とは構成原理を異にするものである。それは union と名づけてもよいかも知れぬが、association と名づくべきものではない。家族の成員を結びつけて居る眞の性質は、

知的又は分析的のものではなく、それは感情的道德的のものである。家族員相互の共同は、人に對する attachement 及び gratitude の感情に基くものであり、同情本能卽ち社會本能によつて引起されるものである。それは理知の支配に基くものでもなく、特定の目的追及の爲めに起るものでもない。勿論家族にも成員相互の分業關係、協力關係は存在するのであるが、此如き作業分化による結合が家族の本質をなすのではない。

最後に個體が形作る最も複雜なる分業關係は、社會に於て觀られる。社會生活は人々相互間に人に對する執着心が動くが故に起るのでもなく、又社會本能卽ち同情に刺戟せられて起るのでもない。人々の結合の基本關係は、人々の間に機能分化がある故であり、分業が行はれて居るからである。社會生活にあつては、同情本能の如きは副次的作用をなすに過ぎない。勿論人々の社會結合にも、同僚に對する愛着心が働いて居るのは事實であり、又此如き愛情が働く事によりて、人々の社會生活は其永續的存立をつゞけ易くなり、其共同生活の安定を得易くなる。併しながら此如き感情に社會生活を指導して行く力があるのではない。社會的感情は訓練によつて人々の間に助長して行く事は出來るとしても、人々は自分等の作業形式とは著しく異る作業形式を取る者、又は極めて間接的な依存關係に立つ者に對して、眞の同情的衝動を動かすと云ふ事は殆んどないであ

らう。此如き社會的本能の完全なる展開は、通常人の生活にあつては、家族生活に於てのみ求められ得る。何故ならば理知作用には普遍化が必要とせられるが、感情の生活には集中化が必要となつて居るからである。廣く全般の人々に對する愛情と云ふが如きものは、概して抽象的のものであり、此如き抽象的の愛情によつては相互の滿足は充分に求め難い。愛情に基く共同は、家族の如き狹い範圍の人々の間に、具體的人格的奉仕のある場合に於てのみ充分に起り得る。社會生活の如き非常に多數の人々、且つ又種々の關係に立つ人々の結合に於ては、同情心や愛情等は多少存在し得るとしても、それが結合の基本をなすと云ふ事は出來ぬ。從來の形而上學的の說明では、社會生活の構成原理と家族生活のそれとを混同して居る。同情は家族生活に於て最も强くあらはれ、家族生活の基本をなすものであり、家族の複合よりなる社會生活に於ては、分業協力の關係が其の基本となつて居る。

社會生活を特色づけるものは人々の間にある作業分化であるが、此作業分化は何等物質的の性質のものたるに限らない。それは又個人間たると、階級間たると、國家相互間たると、更に又民族間たるとを問はない。各部分がそれぞれ特有の機能を以て相互に依存關係に立ち、其結果全體の共同に作用を及ぼす所のあらゆる人的動作に就いて、茲に社會の存立が認められるのである。此如き動作によつ

て、人々は過去の人々の作業を受けつぎ、又之を將來の人々に結びつけて、茲に時間的空間的の共同的全體を構成する。更に又此如き分化と共同との增進により、社會は復雜なる有機體となり、遂には全人類を包含し得る偉大なる有機體を構成するに到る。

人類は如何なる場合に於ても孤立する事は出來ぬ。孤立の個人なるものは現實的には存在しない。個人としての存在は抽象的觀念として許されるのみであり、現實の生活は常に共同による社會的存在である。孤立した個人又は孤獨の家族は、生存の安定を求むる事が困難である。個々人間又は家族間に分業關係、依存關係が生ずる事により、個々人の生活は其安定を得易くなる。それ故に此如き分業と協同とによる社會生活に於て、人々は其生活の安定を得るのであるが、此場合各部分の者は相互の性能の差に基く相互の職務を尊重し、相互に全體の共同に役立つ作業を營むと云ふ意識をもつべきである。此如き意識が强まる場合には、各部分間に調和が保たれ、相互の一致共同は最も理想的に行はれる。併し此如き模範的なる社會生活は、現實世界には尙存在しない。只だ全人類は此理想型に向つて一歩づゝ近づかんとしつゝある。

併し現實世界に於ては、反面に於て社會生活の完全なる和合、一致、連帶の形成上一種の不利益なる事情が起りつゝある。人々が社會を構成すると共に、各部分の分化は次第に增加し、其結果各部分

間に知的又は道德的の差異が起り易くなつて居る。此差異が强まる場合には、部分全體に對する關係は弱まり、各部分は其部分の關心に捕はれ易くなり、全體の共同を熟慮せぬ樣になる。それと同時に、各部分のものは社會的感情を自分等と同じ機能を持つ者の間に集中し易くなり、他の種の機能を持つ者から離れ易くなる。他の種の生活形式を取り自分等と異る機能を營む者に對しては、自分等の觀念及び生活方法丈を以て之を理解する事が次第に困難になる。此如くして各部分の者が部分の關心に捕はれて、全體に對する共同を等閑視し、又部分の者が同樣なる機能を持つ者の間丈に、社會的感情を强める樣になると、各部分は部分的集團に分れ易くなり、各部分の依存關係による全體的統一は維持され難くなる。此如き現象は人間社會に於ける一種の矛盾である。此矛盾を防ぎ、各部分の間にある感情利害等の分裂を防ぐ爲に、茲に部分相互の從屬依存の關係を維持する集中機關が必要となる。各部分の連絡を保ち、相互の連帶關係を助長し、相互の共同を維持すべき機關が必要となる。此如き機關は物的關係に於て各部分を共同せしむるのみならず、又各人の間に知的の一致、道德的の一致を增進すべき任務をもつ。此意味に於ける部分の從屬依存の關係の維持は、如何なる社會に於ても必要であり、それは社會的存立のある所には如何なる所にも見出され得る。併しそれが最も著しくあらはれて居るのは產業社會である。

産業社會に於ては分業が最も多く行はれて居るからである。勿論軍事社會等に於ても此從屬依存の關係の維持は行はれて居るのであるが、それが最も强くあらはれて居るのは産業社會である。而して此如き部分の分化作用は、人間知能の增進につれて益々增加するものなる故、其依存從屬の關係の維持は、知能の增加につれて益々必要となると。

今迄述べた所によりて、コントの考へた社會とは略ぼ如何なるものであるかを知る事が出來る。彼は人間の集團に二つの類型を認め、一つを家族とし他を社會として居る。家族は人々の感情に基く集團であり、それは人々の同情本能(社會本能、愛着の感情)を主として成立するものである。家族に於ても之を構成する人々相互間に分業の關係あり、機能分化に基く協力、依存、從屬の關係はあるのであるが、併し此分業と依存とに家族存立の基本關係があるのではない。然るに社會に於ては、部分の機能分化に基く依存關係が其存立の基本關係である。それは感情に基くと云ふよりは理知性に基く集團である。勿論社會にも感情的の融合は可なり强くあらはれて居り、人々相互の間に社會本能は常に動いて居るのであるが、此如き感情的融合は社會生活の存立及び持續に對して、有力なる助成的條件をなすに止まり、眞に社會の存立に固有なるものではない。眞に社會に固有なるものは部分相互の從屬依存關係である。部分相互の

依存によりて構成せられる人々の集團生活の全體が卽ち社會であると云ふのである。

彼は此如き考へよりして社會的諸現象の有機的相關關係を說き、此如き諸現象の依存に基く全體を一つの有機體なりとし、此社會有機體を以て最高次の發展を遂げる有機體なりとした。卽ち各部分はそれぞれ固有の作用を營み、次第に其機能分化を增進しながら、常に全體としては頗る復雜なる組織體を構成しつゝあると云ふのである。從つて此等の部分現象を、各個獨立のものとして理解せんとするは重大なる誤謬である。それは常に全體に從屬依存するものとして、其全體の存立に對する關係の上より考察せらるべきものである。部分現象は何等絕對的獨立をなすものでなく、總ての現象は全體としての社會に統制せられ、之に結びついて其存立を保つものである。それ故に社會現象は常に全體としての關係に於て、綜合的包括的に攻究されなくてはならぬ。實證哲學は、此等有機的共同、連帶の關係にある各社會現象に論理的連絡を求め、現在文明の諸要點を此論理的系統の內に包容して、之を矛盾なからしめ、又現在と過去とを連絡して、時間的空間的に統一ある社會を完全に理解せんとするものである、と云ふのが彼の主張である。卽ち社會有機體の諸相は一つの基本的統一に依存し、此等の諸相と全體との間には自然的調和、一致、共同依存の關係がある。從つて此等の諸相の一方面

丈を分析抽象して考察する事は、社會生活の眞の理解に到る所以でない。此等諸相、諸現象を全體に結びつけて、之を綜合的、統一的に研究する事が、社會に關する正して理解であり、それが社會學の任務であると云ふのである。

コント社會概念は、各部分の機能分化に基く人間生活の全體的共同である。此全體的共同たる社會は、内に於て各部分相互の依存從屬關係によつて一定の組織を構成し、全體としての秩序を保つと共に、前後を通じて持續的存立をなし、一部分の變動は常に他の部分の變動を伴ひ、全體として連續的變遷をなす歴史的存在である。此如き空間的時間的統一としての社會につき、其構成組織を普遍的に研究する方面を、彼は社會靜學と名づけ、其歴史的變遷を普遍的に攻究する方面を、社會動學と名づけた。前者は社會の秩序に關する攻究であり、後者は社會の變遷進歩に關する考察である。

彼は社會靜學的研究に於て社會的諸現象の共在の關係、一致の關係、連帶の關係を說かんとし、部分の分化作用と其統一作用との關係を究めるのを以て、主たる研究項目とした。而して此分化と綜合關係を說くに先ちて、彼は社會を構成する人類の性質を考察し、人々は自然的傾向として社會生活をなすものであり、何等巧利的要求に基いて集團生活をなすものでないと述べ、人は必然的に社會生活をなものであり、社會生活をなす者が現實の人間生活であり、純個

人的存立は單に觀念上の存立に過ぎないと説明して居る。只だ併し人々は此如き社會的依存關係に入る傾向を持つにかゝはらず、人々には自利的の本能が社會本能(卽ち同情)よりも强くあらはれ、相互の間に保たるべき調和關係を破る恐れある故に、常に同情本能及び共同の感情を呼び起して、社會生活への不安を縮少する必要がある。而して此社會生活上の不安縮少作用は、人々の理知作用の增進に伴い、文化の程度の高まるに從つて、一層必要となるものであり、又それは次第に强く行はれる樣になるものである。知能の働きの弱い場合に於ては、人々の生活は感情に支配される事多く、復雜高等なる文化を形作る事も出來ないが、人々が種々の困難に堪へ、知能作用を高めて高等なる文化を形作る樣になると、部分の分化が增すと共に、相互の依存從屬の關係、相互連帶關係は次第に强く意識せられ、社會的統一維持の作用は次第に强められる、と述べて居る。卽ち彼は社會靜學の研究に先ちて人間は自然の傾向として社會生活をなすものなる事、此社會生活は人々の理知性の展開と共に次第に復雜化する事、及び此社會生活の統一化は人々の知能の働きに支配せられて次第に助長せられる事を述べ、此如き人間が形作る自然的の從屬依存の關係を研究するが此研究部門の主たる目的であるとなし、それより前に述べたる如く、自然的原始的集團を家族なりと考へて家族の特性を考察し、此家族を單位とし、此上に成立する

分業と連帶との關係にある集團を社會として、社會の特性を分業に基く綜合に求めんとしたのである。

彼は社會の靜學的研究に於て彼の考へた社會概念を詳細に述べてをるのであるが、併し彼は更に社會を動的のものと考へ、此動的の社會の變遷進歩の一般的傾向、其變遷の內的原因の攻究を極めて重要視し、此研究によつて彼の學問的要求、卽ち Voir pour prévoir に滿足が與へられると考へた。

コントの考によると、人間生活は其全般的傾向に就いて觀ると、次第に動物性を失ひ、同時に人間性を增加しつゝある。幼稚なる原始人類の生活は主として個體又は種族保存の如き本能に支配せられ、社會的感情に支配せられる事少なかつた。然るに人々が理知の力を用ひ知性の指導に從ふ樣になつて以來、人々は次第に他の人々との共同を重んじ、其社會的感情は次第に高調せられる樣になつた。此社會的感情の高調は人間性の增加であり、それは人類の進步の根本的傾向である。而して此人間性の增加は必意人々の知性と道德性との最高展開に到る過程であり、人々の精神力の完全なる發達に到る過程である。知性の增加は思考能力の增加であり、機能分化の要件である。又道德性の展開は社會的協力の增加であり、社會的連帶の要件である。此二つの精神力の展開は人間生活に於てのみ觀られる。動物生活には世代を累積しても常に同一の生活樣式がつゞくの

みであり、其生活は常に靜的である。然るに人類の生活に於ては此精神力の發現に從つて不斷の進歩がつゞき、其生活は常に動的となる。如何なる人類も究極に於ては此知性と道德性との最高展開を遂げるのであるが、只だ現實の人類生活には、此二性の展開の程度の大小がある。それは人類が居る所の環境の差に基くものたるに過ぎない。如何なる人類もそれが精神力に指導せられ、動的生活をつゞける限り、最後には此二性の完全なる展開を觀るものである。

人間に於ける知性と道德性との展開は人間生活を動的のものたらしめ、社會生活の進歩を促す根本的動因となる、と彼は考へるものであるが、此如き精神力の展開の一般的條件をなし、社會的變遷の副次的動因をなすものとして、彼は人々の愛新性、生命の長さ、及び人口の增加の三項目を上げ、次の如き說明を下して居る。

第一に人類は靜止を好まない。自己の能力を働かして現在の狀態を破り、常に新らしいものを求めんとして居る。人類に此如き傾向あるが故に人類は其知性の增加、道德性の發達を促し、其生活活動を加速度的に增大し、社會生活の復雜化を致すのである。

次に人類社會に於ては新らしき生命は常に古い生命と交代し、古い者に無限の存續を許さない。現實生活に於ては、新らしい者は古い者が作つた作業形式を受繼ぎ、茲に社會生活の持續を致すのである。此場合新らしい者は革新的創造的であり、古い者は保守的固定

的である。從つて新らしい者は古い者よりは更に大膽に知能を展開し、古い者の作つた生活形式よりは、更に新たなる生活形式を實現せんと試みるのであるが、若し古い者の生命が餘り永く續くならば、新らしい者によつて作られんとする社會進歩は阻止せられ易くなる。然るに人間の生命の長さに略ぼ一定の限度があり、古い者の存續に限りがある。それ故に古い者は一定の機能を實現し、社會生活上に何等かの寄與をなしたならば、やがて之を新らしい者に引きつぎ、新らしい者をして更に新たなる生活形式を創造せしむるのである。此樣にして人間の理知性は無限に展開し、機能分化は無限に增加し、社會は不斷の進歩を遂げるのである。併しながら人間の生命が餘りに短いとしたならば、是亦社會進歩を助長する所以のものではない。新らしい者は古い者の作つた文化を受けついで、茲に生活の根據を捕へるのである。新らしい者が絕へず總ての生活形式を創造しなくてはならぬ場合には、從來構成せられた社會的統一の維持が困難となり、古い者のあらはした知性と道德性とを受繼ぐ事が六つかしくなり、新らしい者の生活の根底に一種の不安を與へる事となる。かゝる不安を除き、社會的統一を維持せしめる爲には、古い者が作つた文化を新らしい者に傳へ得る程度に到る迄、古い者は存續しなくてならぬ。人類の生命に一定の長さあるのは、古い者と新らしい者との間に知性と道德性との運用の一致を惹起し、社會の

安定を保障し、統一的全體として社會の秩序の維持と其進歩とを遂げしむる所以となる。

第三に人口の增加も亦社會進歩の重要なる條件である。人口の小なる社會に於ては、作業分化の增加を致し難く、社會生活上の機能の復雜化をもたらし難い。それ故に分業を細にし、各種の機能を特殊化せしむる爲には、人口の密度の增加を必要とする。人口の密度大なる所に於ては、人々はそれぞれの生存要求を滿たす爲新たなる生活方法を求むる樣になり。生活手段は次第に精練せられ、人々の知性と道德性とは更に大なる展開を觀る。

以上述べたるが如き愛新性、生命の長さ、及び人口の增加は人類社會の進歩を促すに重要なる關係をもつものであるが、併しそれ等は社會的變遷の動因としては副次的のものである。進歩の主要動因は人々の理知作用の增加であり、思惟の力の展開であり、此思惟作用に基く社會的感情の高調である。人々は常に理知の力に指導せられるが故に、規則正しき進歩を遂げ、たへず繼續的に發展するのである。此理知作用に指導せられて、社會生活にたへず新らしい生活形式が引き入れられ、茲に歷史を形作るのである。それ故に人類社會の歷史は此理知作用展開の歷史である。此理知作用展開の歷史を觀ると、そこにあらゆる人間の精神生活があらはれ、社會進歩の最も根本的なる軌道を尋ね出す事が出來る。

彼は人間社會の進歩の動因を右の如く考へて、理知の力を重要視し、此理知作用の展開は一般的には三狀態の變遷を經て進歩するものなりとした。理知作用の最も幼稚なる場合には、それは神學的傾向をたどるものであり (Primitivement Théologique)、人々は神學的說明を以て理知的の要求に答へんとする。然るに此如き說明を以て人々が滿足し難くなると、理知作用は形而上學的傾向をたどる樣になり (Transitoirement Métaphysique)、形而上學的說明が施され易くなる。併し此形而上學的說明を以てしても人々は尙滿足するものではなく、其理知的要求は次第に實證的解釋を求めんとする樣になり、遂に理知作用は實證的傾向を取る樣になる (Finalement positif)。

人間の理知性三展開に關する考へは、コントの實證哲學の樞軸をなす思想である。彼は此理知性の展開に伴ふて、社會生活の構成形式が武斷的獨裁的統制に基くものより次第に自發的意識的要求に基く產業的組織に遷り變ると述べ、此武斷的組織より產業的組織への變遷は、理知性の展開に伴ふ必然的成果なりと考へた。宗敎的神學的思想の强い所に於ては、人々は他動的に支配せられ易く、宗敎的權威を持つ者の獨裁的命令は最も强い力を持ち、政治組織も、產業形式も、軍事も、宗敎も總て外部的獨裁に基く武斷的組織となり易い。然るに此如き外部的獨裁は、人々の間に眞の依存從屬關係を永續的に維持し得るものではなく、人々の理知的作用が更に展開する

樣になると、外部的獨裁の權威は次第に弱くなり、社會生活の形式は人々の人間的自發的要求に基いて定められ易くなる。人々は所與の世界を神の意志のみに支配せられる世界とは考へず、其性質を正確に理解し之に人工を施を事によりて、人間の生活に役立つものを作り得ると考へ、茲に產業的技術的組織を形作る樣になる。此產業的組織は人々の自發的要求に基いて起るものであり、それは神學的思想と相容れないものであり、從つて又神學的思想に應じてあらはれた武斷的組織と相容れないものである。それ故に人々の態度が宗教的支配に滿足しない樣になると、次第に產業的組織が人間社會を支配する樣になり、武斷的組織は次第に縮少せられる樣になる。形而上學的傾向の强い時代は、此武斷的組織より產業的組織へ進展する過渡期であり、最後に實證的傾向の起るに及んで、此產業的組織は社會生活のあらゆる方面を支配する樣になる。何故ならば、實證的思想は所與の世界を人間の力に於て合理的に理解し、事物の眞相を人間の精神力によつて捕へんとするものであるからである。それは人間的技術の基本であり、產業的組織の根底である。

彼は人間の理知性の展開と、それに應じてあらはれる社會生活變遷の形式とを詳細に叙述し、原始的人間生活より近世文化人の生活に到る迄の歷史的變遷、特に歐洲を中心としてあらはれた歷史的變遷を、此思想によつて說明せんとし、所謂歷史哲學的考察を以て社

會學の中心問題なるかの如く論述して居る。

以上述べた所を要約して觀ると、コントが考へた社會概念は略ボ次の如くなる。(一)個人とは抽象的觀念的に考へられるものに過ぎず、現實に實在する所のものは社會的に相關關係にある人々のみである事。(二)人々の集團的生活には二種の形態がある事。一つの形態は人々の同情本能を根據として成立する所の感情的集團生活であり、それは家族と云はれる所のものである。他は機能分化を根據とする人々の相互依存關係によりて成立する所の共同生活であり、それは社會と稱せられるものである。但し家族と社會との區別は基本的構成の差について云ふ事であり、一方の集團は他方の集團の構成原理を含まないと云ふのではない。二つの構成原理は總ての集團の存立上及び持續上最も重要なる意味をもつ。(三)社會は部分相互の分業に基く全體的依存關係であり、それは有機的の統一をなすものなる事。(四)而してかゝる有機的統一をなす社會に關する理解は、部分相互の依存從屬の關係を全體として考察し、各部分を全體に連絡せしめて、之を綜合的に考察する事によつて可能である事、卽ち此社會有機體を構成する各部分現象を部分的に切斷して考察する事は、此現象の眞の性質をよく理解する所以ともならず、又此等の部分の綜合によつて存立して居る全體を把捉する所以ともならぬ事、(五)此如き有機的全體としての社會は、其全體的傾向として人間の

理知性の展開に應じて、武斷的獨裁的組織より產業的文化的組織へ進轉する事、卽ち社會的變遷は理知性の進步に促されつゝ一定の方向に向つて移り行く事。

コントの此考へに就いては直ちに次の如き疑問が出て來る。(一)何故に集團を家族型のものと社會型のものとに二分する事に止め、家族型のものと社會型のものとを包攝する集團の特質を求めないのか。(二)集團形態の分類には家族と社會(彼の所謂)との外に尙他の性質の形態が區別され得ないのか。(三)社會が部分の機能分化に基く統一的全體であるとしても、それは生物學的意味をもつ有機體と觀られ得るや否や、生物有機體の統一と、社會の統一とは、統一の基本關係が異るのではないか。(四)社會生活は現實的には諸相の綜合的全體であるとしても、此綜合的全體を綜合的に考察する事によつて、果して社會學なる科學が成立し、社會に固有なる眞相を把捉する所以となるや否や、(五)社會生活の歷史的變遷に就いて其一般的傾向を求め、之によつて社會の變動を說明せんとする事は歷史哲學の問題であり、それは社會學の問題とは別問題ではないか、等々。此等の疑問を起して來るとコントの主張した社會學說は幾多の修正を加へられなくてはならぬ樣になる。

## コント以後の社會學

コントの社會學は社會を部分現象の相關關係にある有機的全體と觀て、之を綜合的に考察し、更に其歷史的變遷の一般的方向を實證的に攻究するのを以て、其學の主たる任務とした。此意味に於て彼の社會學は綜合社會學又は歷史哲學的の社會學と云はれる。此綜合社會學又は歷史哲學的の社會學は、コントが之を主張して以來社會學に於ける一つの重要なる傾向となり、殊にそれは拾九世紀末迄は社會學界に於ける主たる傾向となつて居た。勿論現代に於ても此綜合社會學又は歷史哲學的の社會學の傾向を取る學說は可なり多いのであるが、現代に於ては是とは異なる新たなる傾向が次第に强調され、綜合社會學に對して特殊科學としての社會學を主張する者が次第多くあらはれる樣になつた。

綜合社會學又は歷史哲學的の社會學は社會學界に於ける重要なる一傾向である。少くとも最近迄それは社會學の主たる傾向をなして居た。而して此學派の流れを汲んであらはれたと考へられる社會學の著述は非常に多い。今其內主なるもの丈に就いて觀るも次の如きものがある。

G. Ratzenhofer: Soziologie.

A. Schäffle: Bau und Leben des sozialen Körpers.

| | |
|---|---|
| P. Barth: | Philosophie der Geschichte als Soziologie. |
| P. Lilienfeld: | Zur Verteidigung der organischen Methode in der Soziologie. |
| K. Brinkmann: | Versuch einer Gesellschaftswissenschaft. |
| O. Spann: | Gesellschaftslehre. |
| F. Oppenheimer: | Allgemeine Soziologie. |
| De Gréef: | La Structure générale des Sociétès. |
| A. Fouillée: | La Science Sociale Contemporaine. |
| R. Worms: | Organisme et Sociétè. |
| H. Spencer: | Principles of Sociology. |
| L. Ward: | Pure Sociology. |
| A. Small: | General Sociology. |
| F. Giddings: | Principles of Sociology. |
| 有賀長雄博士 | 社會學 |
| 建部遯吾博士 | 普通社會學 |

綜合社會學又は歴史哲學的の社會學の主張は、現實社會が諸現象の相關關係の上に存立する全體である點に着眼して、諸現象が不可分的關係にある事を說き、此等の不可分的關係にある諸現象を全體としての社會に結びつけ、之を綜合的に研究する事に於て社會に關する眞の理解に到達すると云ひ、更に又此全體としての社會は動的

のものなる故、其動的進歩の方向を尋ぬる事に於て、社會の實相を把捉する事が出來ると云ふのである。併しながら、先づ第一に現實社會はあらゆる社會的諸現象の復雜なる相關によつて構成せられて居るとしても、社會學が此複雜なる諸現象の綜合を社會的存立と見做して、之を社會本位に考察しなくてならぬか否か疑問である。若し此複雜なる現象を、其綜合のまゝに社會本位的に考察せんとする場合には、社會學は個々の社會的諸現象に就いて攻究せられた諸社會科學を、其内に包括し綜合しなくてはならぬ。諸科學を包括し、配列し、綜合す事は百科全書としての意義はあるにしても、一つの獨立科學を成立せしむるものではない。一つの科學が獨立する學となる爲には、其學に獨自なる研究對象がなければならぬ。若し社會學が獨立の科學として存立するとするならば、他の社會科學の求むる所の對象とは異る對象にして、且つ社會學に獨自なる研究對象となるものを求めなくてはならぬ。所謂綜合社會學に於ては、現實社會が諸現象の綜合なる故、社會學も亦此等の諸現象を綜合的に攻究すると云ふのであるが、此如き立場に於ては、社會學が求むべき特有なる研究對象が何であるかを明にする事が出來ず、獨立科學としての社會學の存立を確かにする事は出來ない。現實社會は複雜なる綜合であるとしても、各社會科學は其學に特有なる研究分野を定め、此複雜なる綜合を特有の觀點より分析して、茲に其學に固有なる研

究對象を定めるのである。社會學が學として成立するとするならば、それは社會的諸現象を綜合的に捕へんとするが故に、それが學となるのではなく、其學に固有なる對象を社會なる人間生活の內に見出して來るが故に、始めてそれが學として許されるのである。

次に又現實の社會は動的のものであり、全體として歷史的變遷をたどりつゝあるとしても、此史的變遷の動因を捕へ、社會進化の一般法則を求め、社會的變遷を歷史哲學的に說明するのが社會學の研究問題なりや否やは疑問である。社會的變遷を進化と觀て、此進化の一般的傾向を求め、之によつて人間生活の歷史を說明するのは所謂歷史哲學の研究問題となるかも知れぬ。歷史哲學なる學が如何にして可能なるかは暫く別として、社會學が歷史哲學の問題を捕へて之を自己の研究問題となす時は、それは歷史哲學以外に社會學が獨立に存在する事を否定するものであり、社會學と歷史哲學とを混同するものとなる。社會學が學として成立する爲には、此如き歷史哲學の求めんとする所とは別に、其自身に獨自なる研究分野を求めなくてはならぬ。

綜合社會學又は歷史哲學的の社會學は、最近迄社會學界に於ける最も著しい傾向であつたのであるが、併しそれは他の社會科學の問題を其內に包攝し、共在的相關及び繼起的連鎖關係にある社會的諸現象に關する說明を包括的に把捉して居る以外に、何等社會學に固

有の研究分野ある事を明にして居らぬ。各社會現象はそれぞれ各種社會科學の固有の研究分野中に入れられて居るが、社會學に獨自なる研究對象は綜合社會學によつて明に示されなかつた。それ故に研究對象の不明瞭なる社會學に對して、學としての存立を否定せんとする者が次第に多くあらはれる樣になつた。茲に於て社會學の研究に從事する者の内に、社會學に特有なる研究對象を求め、茲に新たなる研究方面を開拓せんとする者が次第にあらはれる樣になつた。此等の學者は、社會を人間生活上あらはれる諸現象の綜合的全體として、之を包括的に捕へんとするが如き態度を捨て、現實にある集團生活の内に於て社會に固有なる事象を分析的に抽出し、複雜なる綜合によつてあらはれる社會生活中より純社會的なりと認められるものを論理的に抽象して、茲に社會學に固有なる研究對象を定めんとする傾向を取る樣になつた。卽ち人間の社會としてあらはれて居るものゝ中に社會學に固有なる視野を定め、他の諸科學と異る研究方面を開かんとする者が次第にあらはれる樣になつた。現實にある社會生活はあらゆる文化現象の相關關係、文化支持者の相互依存關係に於て成り立つとは云へ、此社會生活にあらはれる所のものは、各社會科學によつて研究せられるべき種々の相を含んで居る。此等の諸相の内、他の科學によつて研究對象とせられて居らず、又社會學以外の科學に於て研究對象とせられる事の出來ぬ相を求め、之を

社會學の特有の研究分野として研究を進める事により、社會學が獨立の科學となる、と考へる學者が次第に多く表れる樣になつた。此等の社會學者の立場によると、社會學は各種の社會現象に關する諸知識の綜合でもなく、又諸社會科學の基本原理を說かんとするものでもなく、尙又それは歷史哲學でもなく、總て他の社會科學と同樣に、社會科學の一分科となる。それは社會生活に關する包括的理解を求めんとするものではなく、特定の觀點よりして、社會につき相對的理解を求めんとするに過ぎぬものとなる。

現實社會の復雜なる諸相の綜合を、全體的包括的に把捉せんとする社會學が、綜合社會學と稱せられるに對して、復雜なる綜合よりなる現實社會中に、社會學に特有なる研究對象を求め、純社會的なるものを外社會的なるものより分析して、之を社會學の研究對象となさんとする社會學は、特殊科學としての社會學と云はれる。此意味に於ける社會學の著述は最近に於て次第に多くあらはれる樣になつたのであるが、今其內重要なるもの丈を觀ると、次の如きものがある。

F. Tönnies: Gemeinschaft uud Gesellschaft.

G. Simmel: Soziologie.

A. Vierkandt: Gesellschaftslehre.

L. v. Wiese: Allgemeine Soziologie.

G. Tarde: Les Lois Sociales.

E. Durkheim: Les Règles de la Méthode Sociologique.

R. Maciver: Community.

高田保馬博士　社會學原理、

特殊科學としての社會學は現實の社會生活中より純社會的なるもの、卽ち社會として最も特有なるものを捕へて、之を社會學の研究對象とせんとするものであるが、然らば何か社會に獨自なるものであるか、社會學の研究對象として捕へらるべき唯一無二なるものは何であるか、と云ふ事に關しては諸學者間に多少觀る所が異なつて居る。それ故に特殊科學としての社會學を說く人々の間には、種々の異說あるを免れないのである。併し此等の人々の社會學に對する研究の態度は、綜合社會學を說く人々のそれとは根本的に異つて居る。今此の立場にある社會學の特色を最も鮮に示して居るものはジンメルの社會學であると考へられる故に、コントの綜合社會學に對立するものとして茲にジンメルの社會學を叙述して觀たい。

# ジンメルの社會學

ジンメルの小傳。Georg Simmel は一八五八年三月一日ベルリンの中央にある最も繁華なる地域に生れた。彼は猶太人の子孫として生れたのであるが、彼自身は後新教に改宗して居る。十二歳にしてギムナージウムに入り、拾八歳にしてベルリン大學に入學した。大學にては四ケ年間の通常の課程を通り、主としてハームス、ツェラー等について哲學を修め、ラツァルス、バスティアン等について心理學を修め、モンゼン、トライチュケ等について歴史を學修した。彼は大學に於て此等の人々に直接接觸したのであるが、此等の人々の外にジンメルの思想上に最も大なる影響を與へた人々としては、ヘラクリツス、カント、ヘーゲル、ショペンハウエル、ゲーテ、ニーチェ等を數へる事が出來る。ヘラクリツスの流轉、生成の思想、カントの論理主義、ヘーゲルの辨證法、ゲーテの藝術的の直觀等は、彼の思想構成上に著しき影響を與へたものと云はれる。併しながら彼が他の人々の所說を其まゝ受け入れるには、彼の個性が餘りに强過ぎた。彼は彼の個性を展開するに極めて强く、彼が學修した學說思想等も、總て彼の獨自の思考形式中に投入し、彼に獨特なる分析力と抽象作用とに訴へて、此等の知識を組織化した。

一八八一年彼はカントの物質論を攻究したる論文 Das Wesen der

Materie nach Kant's physischer Monadologie の外三種の參考論文を提出してベルリン大學より Doktor の學位を得た。それより四年後一九〇〇年彼はベルリン大學の私講師に上げられ、一九〇〇年同大學の a. o. Professor となつた。其後永く彼はベルリン大學に止まり哲學、哲學史、倫理學、宗教哲學、美學、社會心理學、社會學等を講義した。彼の講義は明晰なる論理と、鋭敏なる直觀と、豐富なる知性とによつて組み立てられ、加ふるに極めて印象深い藝術的の音聲と悠々迫らざる態度とを以て述べられたと云ふ。彼は此間に於て哲學、藝術其他に關す多くの學術的成果を發表したのであるが、其内社會學の著述として觀らるべき主なるものには、次の如きものがある。

1890 Über soziale Differenzierung; Soziologische und Psychologische Untersuchungen.—Schmoller's Staats- und Sozialwissenschaftliche Forschungen. X. S. 1-147

1892 Die Probleme der Geschichtsphilosophie; Eine Erkenntnisstheoretische Studie. Leipzig.

1900 Philosophie des Geldes. Leipzig.

1908 Sozio'ogie, Untersuchungen über die Formen der Vergesel lschaftung. Leipzig

彼はベルリンに生れ、ベルリンに育ち、其母校ベルリン大學に於

て約三拾年間敎壇に立ち、且學術上幾多の業蹟を發表したのであるが、ベルリン大學が彼に報ゆる所は極めて少かつた。一九一四年ストラスブルクの大學は彼を正敎授として迎へた。彼はベルリンを去るに忍びず、長く親しんだ敎壇と別れる事を欲しなかつたのであるが、經濟的生活の必要に迫られて遂にストラスブルグに轉任した。併しながら彼の轉任は決して彼の生活を幸福にするものではなかつた。此年から始まつた歐洲大戰爭は、身心共に健全なる學生並びに若き研究生を大學より奪い去り、殊にストラスブルクは戰線の前線に近い所にあつた爲、戰爭が大學を煩はす事多く、學級數は縮少し、講義科目は減殺せられ、尙其上に日常生活資料は次第に減少を告げ、大學生活は殆んど休止の狀態に入つた。此如くして彼は此地に於て精神的にも物質的にも惠まれる所なく、齡六十を最後として一九一八年九月二十八日遂に此世を去つた。此年に先つて彼は

1917 Grundfragen der Soziologie (Individum und Gesellschaft).

を出版した。此書物は Göschen 全集中の小冊子であるが、一八九〇年以來の彼の社會學的構想を凝集したもので、彼の社會學說を伺ふ上に於て見逃すべからざるものである。

彼は全生涯を通じて歐洲の文明を愛し、此文明を破壞する恐れある偏狹なる排外主義をきらひ、此如き排外主義に捕はれて歐洲文明の統一を阻害する戰爭に反對した。彼は猶太人に特有なる冷靜なる

叡知と藝術的な直觀とを以て事物を觀察し、人生を考察した。此如き考察に於て彼は鋭利なる分析の利刀を以て事象を諸關係に分ち、觀點の別に從つて流動常なき人生が種々の姿にあらはれる事を說き、何等捕はるゝ所なき相對主義の立場に於て彼の一生を學術的研究と發表とに捧げた。

ジメルンの社會概念。ジンメルの社會學說は一八九〇年に發表せられた「社會分化論」及び一八九四年にシュモラーの年報に發表せられた「社會學の問題」にあるものを始めとして其後續々發表せられた多くの論文、此等の論文にある所を更に整序し、之を一括してあらはした「社會學」、及び最後に一九一七年に發表せられた「社會學の根本問題」等に色々の表現を以て論述せられて居るが、其基本的の構想は前後を通じて一貫して居る。彼は人生を動的の姿に於て捕へ、人間生活の所產たる社會を人々の動的の作用の上の存在と見做し、此見地に於て社會を機能的の存在と觀、此機能的存在たる社會に於て純社會的なるもの——結社形式——を求め、之を社會學の唯一の研究對象となさんと企てた。

彼の考によると先づ社會を實體的に實在すると云ふ考へは誤りであると云ふ。社會は個々人とは別に存在し、個々人とは異る獨立實在としての組織を持ち、個々人の生活とは獨立に其自身の力によりて存在して居る樣に觀える。それは個々人の生活から取入れられ、

且つ個々人の生活以上に存在する客觀的のものであり、個々人の生活機能とは別な機能をもつものであるかの如く觀える。併しながら他面から考へると現實に實在するものは個々人のみであり、社會は個々人の集合であり、それは結局個々人に分解されてしまふ。從つて個々人の集合を以て一つの統一的獨立的實在と觀る事は出來ぬ。尙又此如き人々の集合を目して集團精神の主體であると考へる事も出來ぬ。人間生活の所產は總て人々自身の心からあらはれるものでなくてはならぬ。個々人を離れ、個々人の心を離れて、それ以外に一つの心的統一體があると云ふが如き考へは一つの神秘論である。少くともそれは人々の觀念內容を獨立的實質的統一體なりと考へる概念上の實在論に類する考へであると思はれる。此樣に考へて觀ると、個々人のみが本來の實在であつて、社會は我々の考察の爲方に於て起る個々人の總和に過ぎない事となる。併し此樣に考へるならば個々人とそれ等の者の動作及びそれ等の者の間の關係のみが科學の本來の研究對象となる事となり、客觀的統一としての社會なる概念は分解されてしまふ。從つて社會は單に主觀的觀念的綜合に過ぎぬと云ふ事になり、客觀的實在としての社會は何處にもないと云ふ事になる。

併しながら此如き個人のみを實在なりと考へる立場は、客觀的實體的統一としての社會の實在を否定すると共に、それ自身の立場を

否定して居るのである。何故ならば、個々人も亦最後の實在のみを取扱ふ認識が要求する如き絶對的の統一體ではないからである。個々人は既にそれ自身に於て多樣(Vierheit)を示現し、純粹なる單一ではない。(此個々人が多樣を示すと云ふ事を吾々が强く考察する事は社會學の合理的基礎を確定する上に最も重要なる前提の一つとなる)。人間は他の有機體と同樣に神の創造的計畫の所產であり、其總ての屬性を備へてあらはれたものであると考へられる限りに於て、人々は完結せる統一體であり、不可分の單一的實在であると考へられるであらう。併しながら諸有機體が原始的形態から人類に向上する迄に經過した無限の變化、各世代を通じて各子孫の上に累積した所の有機的可塑性、及び遺傳質等を熟慮するならば、人間を絶對的形而上學的統一として觀る事は疑はしくなる。人類は寧ろ多樣なる諸因子の綜合的所產である。此等の因子は性質上及び機能上、偶然的相對的意味に於て相合して統一を形成して居るのである。それ故に個人主義的立場に於て最後の實在のみを取扱はんとするならば、現實的存在として殘るのは個人の生活活動を支持して居る所の諸因子のみとなり、一切合成せられたものは現實性の程度の僅少なるものとなる。個人の心が最後の實在的根據を持たぬ限り個人の心の統一も具體的存在としては許されない。心理的諸現象の唯一單一なる支持者があると云ふ事は、實體的には論證せられ難い。更に又

心の實體的統一が許されぬばかりでなく、心の諸内容の間にも何等客觀的統一は見出されない。一人の人の意識活動の發現も種々の場合に於て複雜多樣なるあらはれを持ち、是等を一切原本的なる心の統一(我)の調和的發展として捕へられ得る樣な點を求むる事は不可能である。此樣にして一切の變化及び對立の起る根原とせられ、一切の個別的表象の上に存在してそれ等を統一的に包括するものであるとせられて居る「我」も亦、空虛なる一つの觀念に過ぎぬと云ふ事になる。從つて此立場に於ては、諸因子の諸運動と諸表象とを綜合して、個人の實在を考へる事は不精密であり、主觀的となる。それ自身客觀的實體的統一であるものゝみが眞の統一的存在と見做され、諸統一體の一層高い構成物が、單なる觀念的綜合に過ぎないと考へられ、而して此如き構成物は最後の實在たる諸統一體(諸因子)へ還元する事が科學認識の要求であるとせられるならば、最早人々の構成する社會の實在が許されないのみならず、個人も亦一つの主觀的綜合に過ぎぬもの見做されなくてならぬ。

ジンメルは此如く、實體的存在のみを統一的實在とする限りに於ては、高度の綜合的構成物である社會の實在も許されず、又個人の實在も許されないと考へ、現實的統一體たる構成物の統一を、他の根據に於て論證せんとした。即ち彼は絕對的實體的の實在を以て統一的存在と觀る論據の外に、機能的作用の存在を以て事象に相對

的統一を許す立場を取つた。彼の考によると、統一化（Vereinheitlichung）に相對的客觀性を與へる根據は、諸部分間の相互作用（Wechselwirkung der Teile）に外ならない。經驗的現實的世界に於て事物の統一とは、各部分、各因子の間に相互作用ある事に外ならない。部分が相互的に動的關係を成して居る所のものを捕へて、吾々は其度合に於て統一的存在と稱するのである。從つて統一とは動的の概念であり、統一的存在とは機能的の存在である。個人の如き有機體を有機的の統一と觀るのは、此有機體の各部分の間に力の交換作用が密接に行はれて居るからである。有機體の各部分相互に行はれる力の交換作用が、此等の各部分と外世界との間に行はれる交換作用よりも遙に密接であるからである。更に又個々人の心に統一性を認めるのも同樣に、各表象間に極めて密接なる機能的關係があるからである。同樣にして國家の統一は國民相互の作用の上に認められ、一切の集團に觀る社會的統一は此集團を構成する個々人間の心的相互作用の上に認められる。我々が社會と呼ぶ所にものに於ては、各部分間に相互作用の行はれて居る事は明白である。社會は個人と同樣にそれ自體に於て完結せる絕對的統一體ではない。社會は諸部分の現實的相互作用の結果に過ぎず、第二次的の存在たるに過ぎない。諸部分間の關係及び作用があつて、之に基いて社會的統一體が認められるのであり、社會的統一體があつて其統一的性質か

ら諸部分の關係、變化が生ずるのではない。個體相互間に相互の影響が及ぶ場合に於て、茲に相互間に機能的關係が生じ、此機能的の相互關係が統一的に作用するが故に、此動的關係に結ばれて居る所のものを一層高度の綜合として、それ自體に於て現實的統一をなすものと認めるのである。此樣の意味に於て社會は統一體からなる統一體であると考へらる。それは統一體相互の作用の上に存する動的の統一である。從つて社會的統一とは相互作用の過程に外ならない。此樣な機能的の意味に統一を理解する事に於て、個人によつて構成せられる社會を現實的に統一をなすものと許す事が出來、社會的統一に客觀性を認める事が出來、社會的構成の獨立性を認める事が出來る。

彼は此如くして、社會的實在を實體的に認めんとする立場を避けて、之を機能的統一體なりとした。彼の考によると凡そ人と人と間に相互作用を惹き起さしむるものは、人々の持つて居るそれぞれの衝動、目的、關心である。此等の衝動、目的、關心には愛情に關するもの、知的慾求に關するもの、或は美的又は道德的要求に基くもの等種々樣々のものがある。人々は此等種々の衝動、目的、關心に刺戟せられて、種々樣々の意味の對人關係を惹起す。卽ち各種の目的、關心等は人々を驅つて種々樣々の社會關係を惹起さしむるものである。此樣な復雜なる關係からなる社會關係、卽ち集團現象は、

之を構成要素、結合因子に分解して其方面より考察する事も必要ではあるが、併し此如き各種各様なゞ關係にあるものを、究極の構成要素に分解する事は極めて困難であるばかりでなく、之を究極要素に分解する場合には、茲に捕へんとする社會なるものは消失してしまふ。それ故に此等の要素(人々の持つ目的關心等の內容)によつて構成されものを考察せんとするならば、此等の要素の上に生ずる機能關係に重きを置き、茲に行はれる相互作用の「內に於て」又此作用を「通じて」(in und durch) あらはれる人々の關係を統一的のものとして、之を社會と認めるの外ない。卽ち人々の目的、關心に基く行動が相互作用なる型によつて結びつけられる場合に、茲に社會の存在を認めるのである。一切の關心が個々別々の人々を、相互作用なる一般概念に屬する型(相扶、相存、相反)の內へ組み入れた場合に、茲に結社を生じ、社會的統一を形作ると云ふのである。從つて社會は何等實體的の統一ではなく、それは人々が相互に運命と態度とを受授する機能であり、過程である。

Gesellschaft ist dann allerdings sozusogen keine Substanz, nicht fuer sich Konkretes, sondern ein Geschehen, ist Funktion des Empfangens und Bewirkens von Schicksal und Gestaltung des einen von Seiten des andern. (Grundfragen der Soziologie, S. 15.)

彼の社會概念は機能的概念であり、人々の心的相互作用の上にの

み許される相對的實在概念である。彼は社會をかく理解する事よりして、機能的存在としての社會の屬性に就いて、種々の說明を試みて居る。彼の考へた社會は大凡そ次の如き性質のものである。

先づ第一に社會を人々の復雜多樣なる衝動、目的、關心に基く相互作用、卽ち機能の上に認めるのであるが、かゝる機能的の關係には相互扶助の關係 (Füreinander) 相互共存の關係 (Miteinander) 相互反對の關係 (Gegeneinander) の三關係が許される。從つて社會は常に親和的の相互作用にのみ存在するのではなく、反對的の相互作用の上にも認められなくてはならぬ。相互作用が相互肯定的に行はれる場合のみならず、それが相互否定となる場合に於ても、各因子が相互作用によつて結ばれて居るが故に、茲に社會の存立を許さなくてはならぬ。相互作用には統一化作用となるものもあり、分化作用となるものもある。調和と不調和、親和と競爭、友情と嫉妬との二種の關係は常に社會生活の內にあらはれて居る。對人關係は soziierende Richtungen と dissoziierende Richtungen の不可分離の交錯であり、社會は結合と分離、共同と反對との相互作用の二大範疇が織り出した結果である。愛情に基く相互作用が行はれる場合に、人々は相互に心中にて深く結びつき居ると同樣に、競爭反對の態度を以てする相互作用の行はれる場合にも、人々は相互に强く心中に於て結びつきつゝある。單に親和作用のみが社會的統一を形成する

のではなく、反對鬪爭も亦同じく統一を形成するのである。例へば經濟的競爭が相互を制約し、相互の平衡を保たしむるが如き、又爭鬪が一方の征服による從屬に到り、又は相互親和の平和關係へ導かれるが如きは、反對作用が統一化の過程である事を示す。從つて社會は親和的相互作用の上にのみ認むべきではなく、反對的相互作用の上にも許されなくてはならぬ。

次に又社會は心的相互作用の上に認められるとするならば、此相互作用には數と密度とに應じて、種々度合の異るものある譯であり、從つて社會には段階的の差異ある事が許されなくてはならぬ。個々人間に行はれる心的相互作用の凝結化、形體化の程度の大なるものもあり、又それの極めて薄弱なるものもある。或は又個々人間の心的相互作用の反復的に行はる事强きものもあれば、又それの極めて弱きものもある。卽ち持續性の大なる社會もあれば、小なるものもあり、統一作用の程度の大なるものもあれば、小なるものもある。所謂法律、慣習、宗敎、言語等の諸制度の形體化を効果して居るが如き、統一作用の强い社會もあれば、此如き固定化した人々の行動形式を持たないものもある。一時的の旅行の道連れと云ふが如き人々も、相互に心的作用を及ぼして居る限り、一つの社會をなして居るのであり、又家族や、國家の如き强き統一化を形作るつて居る集團の所屬員も、亦社會をなして居るのである。

更に又人々の間に行はれる相互作用は何等固定的のものでない故に、かゝる相互作用の上に認められる社會の統一化は常に可變的である。新に綜合化が增加する場合もあれば又それが縮少なる場合もある。社會の統一化は何等固定的でない。相互作用の消長と共に社會的統一化も消長し、相互作用の發現に强弱の差あるに應じて結社の統一性にも强弱の差を生ずる。種々の目的、關心に動かされて居る人々の間に、强く相互作用が行はれる場合に、其統一作用は强まり、生活上の便宜や必要に迫まられて諸種の制度が形體化し、かくて社會的統一は更に助長せられる事となる。併しながら若し此等の人々の間にある相互作用が弱まる場合に於ては、人々の統一化を助長する制度も亦やがて萎縮し消失してしまふ。人々の持つ所の特定の目的、關心等が人間生活て取つて重要なる意味を持つ場合には、此目的、關心に基いて人々の間に强き相互作用が起り、此目的關心は相互作用の型を通じて客觀化され、制度化される。卽ち制度は社會化の所產であり、制度の存在が社會に統一性を與へ社會の存立を基礎づけるのではない。

最後に又心的相互作用のある所に社會の存在を認めるとするならば、特定の社會の範圍の限界は根めて不確定となる。心的相互作用は必ずしも直接的なる事を必要としない。假令間接的に行はれる相互作用にしてもそれが心的相互作用である限り、茲に社會の存立を

許さなくてはならぬ。かくの如き直接的又は間接的の相互作用は、同種又は異種の目的、關心に動かされて、種々なる度合の差を以て、種々樣々の人々との間に行はれる。從つて或る場合に見られる結社の範圍と他の場合に見られる社會の範圍とは必ずしも一致しない。相互作用の行はれて居る廣い範圍を取つて社會となす場合もあれば、又其狹い範圍を取つて社會と見る場合もある。從つて社會の範圍の限定は極めて不確定になる。

此如く彼の考へる社會は極めて流動的、段階的のものである。卽ち社會の統一化の程度に種々の差ある事を認めなくてはならぬ。國家、組合、政黨、教團、家族の如き一定の型の定まつた社會もあれば、然らざるものもある。意識的なる相互作用、永續的の相互作用等種々樣々の結社過程がある。個々人は相互に注視し、嫉妬し、相互に文書、談話を交換し、食事を共にし、又相互に同情し、相互に反感を持ち、或場合には他愛的感情を以て相互に離れ難き結合を形作り、他の場合には單に道の方向を尋ねると云ふに過ぎぬ簡單なる接觸を保つ。此等は總て人々の間に行はれる心的相互作用なる限りに於て結社過程であり、社會的統一を構成するものと云はれる。

以上述べた所によつてジンメルの社會概念が如何なるものであるかを知る事が出來る。彼はかく人々が目的、關心等に動かされて相互に動的關係に入る場合に、社會の統一化が認められるとするので

あるが、彼は更に進んで社會を廣狹二義に解し、現實的の統一化として見られる廣義の社會と、社會學に於て取扱ふ純社會的なるもののみに就いて觀られる狹義の社會とを區別した。現實的には、諸關心、目的、衝動に動かされる人々が相互に機能的關係に結ばれて、茲に社會を構成するのである。卽ち個々人は各種の目的、關心を以て相互に作用し、此目的、關心を相互作用なる型に投入して、茲に結社を形作るのである。併しながら此等の社會的統一に於て、社會に固有なるもの、純社會的なるものを求めんとするならば、それは個々人を動かして居る目的、關心、衝動等ではなくして、社會化の過程——統一化の過程——相互作用それ自身と云ふ事になる。卽ち現實的の社會は、人々の目的要求等が相互作用なる波動を起した場合に認められるのであるが、此波動から此波動を內容的に滿たして居る人々の目的、要求等を捨て去り、相互作用なる波動の型丈を分離する場合に於て、茲に社會に固有なるものを捕へる事が出來、純社會的なる社會を抽象する事が出來ると云ふのである。

彼の考へによればあらゆる目的、關心又は衝動と云ふが如きものは、人々をして結社過程に向かはしむるものであり、それは結社をなす人々に存するものである。それは結社過程自身とは異り、結社の內容をなすものでる。此如き結社過程の內容をなすものには、宗教的のもの、經濟的のもの、政治的のもの、知的のもの、感情的の

もの等種々樣々のものがあり得る。併し此等の目的、關心等は總て社會化の資材であり、相互作用を促す動機である。それ等はそれ自身社會をなすものでない。此如き資材が相互作用なる型に入れられる場合に於て、始めてそれが社會的顯現を得るのである。從つて現實に社會となつてあらはれるものは結社過程の資材たる內容と相互作用と云ふ形式との合一せるものである。現實の社會は此二者の不可分的合成である。相互作用卽ち社會化なる形式を離れて資材たる內容が社會的にあらはれぬ如く、此內容とは別に社會化なる形式が形式丈としてあらはれるのでもない。現實的顯現に於ては結社の內容と結社形式とは不可分離である。併しながら社會學に於て研究主題とする社會は、現實的にあらはれるまゝの社會ではない、と彼は主張する。社會學に於て取扱ふ所は、社會に獨自なるものであるべく、他の諸科學に於て取扱はれる所の研究對象とは異る對象であり、唯だ此學にのみ研究對象となるものでなくてはならぬ。然るに社會化の內容となるあらゆる資材は、旣に他の諸科學の研究對象となり、又それ等は他の諸社會科學の對象となるべき性質のものである。此等社會化の諸內容は、特定の相互作用を通じて特定の社會にあらはれるとは云へ、それは純社會的なるものではなく、外社會的のものである。從つてそれは社會に特有なるものではなく、社會學が取扱ふべき研究對象になり得るものではない。現實の社會に於て

社會化に特有なる事象は結社形式のみであり、相互作用の形式のみである。此形式を通らぬ限り、如何なる目的、關心も社會を構成し得ず、此形式を通る限りに於て、總ての目的、關心は社會化の內容となり、社會生活の上にあらはれる。それ故に社會に固有なるものは人々の持つ所の諸の目的、關心、卽ち社會化の資材にあるのではなく、此等の資材たる諸內容を結びつける結社形式にあると云はなくてはならぬ。此結社形式卽ち心的相互作用としての形式こそ純社會的のものであり、社會學に唯一の研究對象となるものである、と彼は說くのである。

ジンメルの社會學。ジンメルは右に述べたる如く社會を機能的の存在となし、動的の一過程となし、之を心的相互作用の過程なりと觀たのであるが、彼の社會學は此社會槪念を論理的に確立せんとしたものである。彼は先づ綜合社會學及び歷史哲學としての社會學を否定し、彼の所謂形式社會學を樹立せんとした。

彼の考によると歷史科學及び人間に關する科學は近代に於て著しく人間の社會に關する科學となつた。藝術、宗敎、道德、經濟、政治等のあらゆる文化現象は個人本位の見方から社會本位の見方に移され、社會的諸勢力及び諸集團運動が眞に事象に作用するもの、事象を決定するものであると考へられる樣になつた。併しながらかゝる見方は認識の一方法たるに過ぎず、此見方自身が特別な一科學を

樹立し得るものではない。若し社會學が社會の中に起る諸過程並びに諸個人的事象をも、總て社會的諸勢力へ還元し、此等を社會本位に攻究する事の一切を總括して、それで以て一つの獨立の科學となると考へたならば、それは社會本位に考察せられる諸精神科學を總括して、一つの概括的名稱を與へたに過ぎぬ事となる。社會本位に人間事象を考察する事は現代の强い傾向ではあるが、併し諸の事象を社會本位に考察し、之を總括しても何等獨立の科學をなさぬ。現實の社會生活は人々の各種の目的、關心が相互に作用し合ふ所にあらはれて居る。從つて人々の目的、關心に基く諸の政治的、經濟的、宗教的、道德的、藝術的等の現象は、社會的顯現をなし、社會的過程として說明せられ得る。併しながら此如き諸現象に關する社會本位の說明を綜合して觀ても、それは諸種の社會科學の綜合に對して一つの名刺を貼付したに過ぎずして、何等特有の科學を成立せしむる所以とはならぬ。それ故に社會生活上にあらはれる諸社會現象を、社會事象として考察し、之を綜合して社會學の存立を主張せんとするも、それは何等社會學の樹立を基礎づけるものでない。

次に又彼は歷史的發展の法則を求めんとする意味に於ての歷史哲學として社會學を否定せんとする。彼の考によると歷史の法則なるものは發見せられ得ない。何故ならば、歷史は一方に於ては外的、並びに心理的諸事實の甚だしく複合せる構成物であり、他方に於て

は總體的事象より不確實に且つ主觀的に區切られた斷片的事象である。それ故に全體としての發展に對して統一的な法則を與へる事は不可能であるからである。若し歴史を法則に從ふ發展として理解せんとするならば、歴史を能ふ限り單純な且つ等質的な部分過程に分解する事によつて、かゝる理解は可能になる。併しかくする事によつて、人間活動の總體的流れとしての歴史そのものは諸の個別的特殊的歴史科學の諸系列に分解せられ、其總體を一般概念の中に把捉して其展開の法則を求めんとする事は不可能になる。此等の特殊的歴史科學の諸對象は、實際に於ては全然個別的に別立してあらはれて居るのではなく、且つそれ等の科學を合一する事によつて歴史の總表象を求め得るのであるが、併し歴史的發展の法則は此總表象の上に求められるのではなく、等質的なるものに分解せられた部分過程の上にのみ求められる。社會生活は諸關心に基く相互作用の複合であり、人間活動の展開の複合であるとしても、此社會生活の總體的發展の歴史の法則と云ふものは求められない。從つてかゝる法則を求めんとする意味に於て社會學なる科學は成立しない。次に又個々の歴史科學を合一する事に於て、社會生活の歴史の總表象を得るとしても、それによつては何等歴史の一般的法則が求められるのでない。從つて此意味に於て歴史科學を複合しても、何等社會學なる科學の成立する理由は求められない。

此如く綜合科學又は歷史哲學としての社會學を否定して、彼は結社形式のみを抽象して、之を唯一の研究對象とする社會學を樹立せんとした。彼の考へによると科學が成立する爲には、與へられたる資料を一定の範疇を通じて認識對象とする事を必要とする。所與の世界は無限に複雜である。此複雜なる世界を其まゝ一科學の研究對象とする事は許されぬ。何故ならば各科學が捕へるべき對象を所與の世界から抽象する範疇は各科學に獨自なるものであり、各科學は此獨自なる形式を以て複雜なる現象の一面又は一系列を抽象し、茲に科學的概念構成をなすのみであるからである。科學的概念構成に於ては、現實にあるがまゝのものを捕へて之を研究するのではなく、一定形式に於て抽象せられた現實の一面を研究對象とするのである。卽ち現實の事象を一定の立脚點より分析抽象し、茲に相對的概念を構成する事に於て、それぞれの科學が成立するのである。此意味に於てそれぞれ範疇の異るに從ひ、立脚點の異るに從つて、現實の異つた方面が分析せられ、異つた研究對象が抽象せられ、異つた科學が形作られるのである。現實は複雜多樣であるが、科學は此現實を特殊的、一面的に抽象し分析する。現實は綜合であり、全體として包括的であるが、科學は現實を特殊相に於て把捉する特殊的認識である。

社會學が科學として成立する爲には此學に特有なる認識對象が求

められなくてはならぬ。社會學に特有なる範疇に於て抽象せられる對象、他の科學の研究範圍と異り、社會學に固有なる研究の分野が明にせられなくてはならぬ。併し茲に云ふ所の社會學に固有なる研究の分野の確定とは、新らしい未知の事實を求めると云ふ事ではない。社會學の求めんとする研究の分野は吾人の日常經驗する現實の社會生活の内にある。此現實社會生活の内より純社會的と見られる方面を一定形式に於て抽象し、之を此學に特有なる認識對象となすのである。然らば社會學が求むべき特有なる研究對象は如何にして定めらるべきか。現實の社會生活は感覺的内容、精神的内容、技術的内容等が相互に作用し、相互に混入して複雜なる樣相を呈して居る。而して此等の諸内容はそれぞれの範疇を通じて各科學の内に取入れられ、各科學の特有なる研究對象となつて居る。併しながら此等の諸内容は同種のもの相互に、又は異種のもの相互に、動的關係をなして現實社會を構成して居るのであるが、此等の内容を相互に動的に結びつける形式丈は、未だ何れの科學の研究對象ともなつて居らぬ。此等の内容相互の結合形式丈を抽象し、此形式を一切の内容と切り離して之を研究對象とした科學はない。現實社會は此等の諸内容が相互作用の型に組み入れられた場合にあらはれるのであるが、此如き内容と内容との結合を、單に結合の形式としての方面丈に於て抽象し、此結合形式丈を論理的に分析して、之を研究對象と

なし得るものは社會學あるのみである。何故ならば此結社形式こそ社會に特有なるものであり、他の如何なる科學の研究對象ともなつて居らず、社會學に殘された唯一の研究對象であるからである。社會學は此結社形式丈を現實社會から抽象し、此結社形式と云ふ方面丈に就いて現實社會を考察し、茲に概念構成をなす場合に於て、始めて他の諸科學と同樣に社會科學中の一特殊科學として成立するのである。恰も與へられたる物質世界に於て物質內容の空間的連鎖形式丈を抽象し、分析して、此形式を滿たす所の一切の諸內容と切り離して、茲に幾何學なる科學が成立すると同樣に、人と人（人々の持つ內容と內容）との結合形式のみを一切の內容から論理的に切り離して、茲に社會學の研究對象が確定せられ、社會學たる一科學が成立するのである。

人々に行動を惹起さしむる所のあらゆる目的、關心、衝動等はそれ自身何等社會的顯現を得るものではない。此等の內容と內容とを統一化に導くものは心的相互作用なる形式あるのみである。心的相互作用の形式を許す事に於てのみ、此等の諸內容は社會生活の上にあらはれるのである。此相互作用なる形式を離れて社會はなく、又總て社會の存立する所には必ず此心的相互作用の存在を見る。現實的、歷史的に存在する如何なる集團に於ても、常に此相互作用の形式を見出し得る。それ故に社會を社會として研究する場合に、唯一

の範疇となるものは此心的相互作用の形式を措いて他に之を求める事は出來ぬ。此相互作用の形式を通じて現實社會を分析し、之を社會學の研究對象とする事に於て、社會を純社會として取扱ふ事が出來るのである。

彼は此如く心的相互作用の形式を以て社會學の概念構成の基本的範疇なりとし、結社形式と云ふ見地よりして社會學の研究對象を定め得るとなしたのであるが、彼は此如き結社形式の發現の主なるものとして、支配と服從(Ueber-und Unterordnung)、競爭(Konkurenz)、模倣(Nachahmung)、分業(Arbeitsteilung)、黨派の構成(Parteibildung)、代表(Vertretung)、交換(Tausch)、內的共同の集中性と外的排他性との同時的存立(Gleichzeitigkeit des Zusammenschlusses nach innen und des Abschlusses nach aussen)、及其他種々の形式ある事を述べ、總て此等相互作用の形式は社會化の內容の同質又は異質とは無關係に、あらゆる集團に於て認められる形式であると主張して居る。此如き形式は種々なる資材に於て、又種々雜多なる目的、關心の爲に起り得る。此樣な社會化の形式は宗教教團に於ても、國家に於ても、秘密結社に於ても、經濟的の組合に於ても、文藝上の流派に於ても又は家族に於ても認められる。集團形式の資材たる內容は種々雜多であるとしても、此等の集團の形態及び展開に於てあらはれる所の結社形式は等しい場合があり、又集團形成の內容は等し

いとしても、其內容が投入せらるべき結社形式は、競爭の形式であり、又分業共同の形式である等、必ずしも一樣でない場合もある。それ故に此等の結社形式を一切の結社の資材、內容から論理的に分析する事が許され、又かく分析して、其形式の確定 (Feststellung)、組織的整序 (Systematische Ordnung)、心理的說明 (Psychologische Begründung)、歷史的發展 (Historische Entwicklung) を研究問題として、社會學の研究範圍が確定せられる。

以上述べた所によりジンメルの主張する社會學が如何なる意味のものであるかを略ぼ明にし得る。彼の主張する社會學の要點は(一)社會的統一は心的相互作用なる機能上にのみ許され、此機能が社會に固有のものであり、社會學の唯一の研究對象となる事、(二)現實社會は社會化の內容たる目的、關心等と其形式たる相互作用とが不可分的に合一したるものであるが、社會學に於ては、此現實の不可分的存在を論理的に分離して、相互作用なる結社形式丈を研究對象とする事。例へば球を觀察する場合に此球を構成して居る資材と此球の幾何學的形式とが考へられる。此球は現實的には資材と形式との不可分的合一である。併し之を論理的に分析して形式を形式として取扱ふ場合に於て、始めて球に關する幾何學的認識が得られる。若し此場合資材に就いて球を考察するならば球は無限に複雜なるものとなり、之に關して普遍的知識を得る事は出來ぬ。社會に關する

認識も同樣である。現實の社會より一切の內容たる資材を捨てゝ、純結社式丈を把捉する事に於て、社會に獨自なるものを求める事が出來、純社會的なるものに就いて普遍的知識を求める事が出來る。(三)茲に純社會的なるものとした結社形式は社會の存立を基礎づけるものであり、社會の存立あつて其上に結社形式が成立するのではない事。現實の社會生活は人々の複雜なる要求に基いて行はれて居る故、種々なる社會化の內容が多くの相互作用を通じて對人關係を形作つて居る。それ故に此現實の社會生活から特定の內容に基く相互作用を取り去るとしても、尙此社會は社會的統一を保つて居る。此如き場合には相互作用を取り去つても尙社會的統一の存在が認められる故、相互作用は社會を基礎づけるものでない樣に觀える。併しながら現實の社會から一切の相互作用を取り去るとしたならば、其所に尙社會的統一が認められるや否や。一切の相互作用を引き去つた跡に殘るものは、人々の內にある個々の目的、關心、衝動等に過ぎない。其所には最早何等の統一化も認められず、社會も存在しない。從つて心的相互作用の外に社會化の基礎づけをなすものはなく、此心的相互作用と云ふ結社形式こそ社會の成立を決定する唯一のものと認められる。と云ふ三點に歸する事が出來る。

ジンメルの社會學の部門。ジンメルは社會に固有なるものを心的相互作用の形式に求め、此形式として抽象せられるものを研究對象

とする事に於て、結社形式の學、彼の所謂社會學を樹立せんとしたのであるが、彼は此如き純結社形式を取扱ふ社會學を純粹社會學(Reine Soziologie)と稱し、之を以て社會學に固有なる問題を取扱ふ部門とした。併し彼は此純粹社會學の外に、一般社會學(Allgemeine Soziologie)、及び哲學的社會學(Philosophische Soziologie)なる部門が成立する事を認め、此三部門を以て廣義に於ける社會學が成立すると考へた。

彼の云ふ所の一般社會學及び哲學的社會學に關しては、主として彼の最後の著述である『社會學の根本問題』中に、其問題の範圍が多少叙述してある丈であるが、それによると、一般社會學とはそれぞれの目的、關心等の內容が結社形式の內に投入せられる場合に、此結社形式を通じて起る對人關係の性質を考察せんとするものであり、哲學的社會學とは社會學的認識可能に關する問題、及び社會の形而上學的性質に關する問題を取扱はんとするものである。人間の社會生活は結社形式丈に於て形作られて居るのではない。現實の歷史的、社會的文化は、あらゆる人間的要求が相互作用の型を通じて社會的發現をなすのである。此現實的社會を結社形式に基礎づけられたものとして理解せんとするのが一般社會學の任務である。純粹社會學は結社形式自身を抽象して、其性質を考察せんとするものであるが、一般社會學は現實の社會生活を其根底に作用する結社機能

の所產として考察せんとするものである。前者は結社形式それ自身丈を視野の内に捕へるのであるが、後者は此結社形式を背景とし、之を前提とする歷史的、現實的社會生活を視野の内に置かんとするものである。併し此等二つの社會學は何れも社會なる經驗的事象に關する概念構成である。それ等は經驗に出發し經驗に止まる個別的科學である。此如き經驗科學の認識が許される爲には、其認識の條件、前提、根本概念、等が確定せられなくてはならぬ。卽ち社會學的概念構成が許される爲には、それが經驗的素材に近づき得る認識形式が確定せられなくてはならぬ。然るに此如き認識形式が如何にして許され得るかは經驗科學の問題ではなく、それは認識論の問題である。此意味に於て經驗科學としての社會學は社會學的認識可能の問題に關して、此科學の根底に於て哲學に接觸する事となる。卽ち社會學は其學的成立の基礎を認識論に求めて居る。次に經驗科學としての社會學の知識が得られたとしても、更に其上に尙社會生活に關する形而上學の問題が殘つて居る。社會生活は人間の目的なりや、又は個體生存の手段なりや、それは個體の存立を防げるものとならぬや否や、或は又社會は其機能に於て、客觀的精神の創造に於て、又は其倫理的性質に於て價値づけられるや否や、等の社會生活に關する形而上學的問題、卽ち相對的事象の絕對的實質、社會の意義、目的、價値、宗敎的性質等に關する問題は經驗科學の問題では

なく、個別的經驗科學としての社會學的攻究の後に於て、其科學的攻究の上層に見出す哲學的の問題である。從つて此意味に於て、社會學は其研究の最後に於て形而上學に接觸する事となる。此如く經驗科學としての社會學は其成立の根底に於て認識論に接し、其研究の最後に於て形而上學に觸れ、個別科學として範圍の彼方なる上下二面に於て、哲學の問題に挾まれて居る。此等經驗科學としての社會學が上下二面に於て接する哲學の問題を取扱ふのが、彼の所謂哲學的社會學の任務である。それ故に彼の哲學的社會學は社會學的認識の基礎を與へ、更に社會的存在の形而上學的意味を明にするものであると云はれる。

## ジンメル以後の社會學

ジンメルは社會を歴史的現實的の社會と、純社會的なる結社形式とに分け、心的相互作用なる結社形式を以て社會學に特有なる研究對象とした。彼の主張する社會學說は相互作用說と稱せられるものであるが、此如き相互作用の形式を社會學の特殊領域とする考は、ディルタイ (W. Dilthey) に迄遡つて觀る事が出來ると云はれ、ディルタイ自身も亦、ジンメルの相互作用說が出る以前に於て、社會の外的構成を以て特殊科學の領域になる事を述べたと云ふて居る。併し此相互作用說が社會學の上に大なる波紋を畫く樣になつたのは、ジンメルの純粹社會學の提唱あつて以來の事であり、彼の社會學說があらはれる頃より、又はそれ以來、多少此相互作用說を限定し修正してではあるが、此考を取る社會學者は非常に多い。

併しながら彼の主張した純結社形式、卽ち心的相互作用のみを以て社會の存立を許し、是れのみを以て社會學の研究對象とする立場には、種々の反對說があらはれた。例へばシュタムラー (R. Stammler) は外的に規制せられた人的共同生活 (Ein durch äusserlich verbindende Normen geregeltes Zusammenleben von Menschen) を以て社會生活なりとし、個々人の心的相互作用と云ふが如き個々人の心理的事象を以て社會概念に到達する事は出來ぬと云ひ、又ケルゼン

(H. Kelsen) は社會的客觀的構成物は相互作用と云ふが如き心理作用の過程ではなく、此過程の内に實現せられる精神内容である。それは心的過程の如き斷續的のものではなく、心的過程の存否如何とは別に、持續的に存するものであると主張して、ジンメルの相互作用説を非難した。此等の人々の外にも彼の相互作用説を論難する者は可なり多いのであるが、彼の相互作用説に就いて考へらるべき疑問としては主として次の如き點が問題となる。

(一)心的相互作用は結合過程たると同時に、反對の過程である。結合過程は統一化の過程であり、社會化の過程と見られるも、反對の過程は社會化の過程となるとは云はれぬ。然るに反對の過程も心的相互作用なる故、心的相互作用を以て社會に固有なるものであると云ふ事は出來ぬ。

(二)心的相互作用は心理的の過程である。社會は果して此如き結社過程の上にのみ存立するものであるか。過程は機能の實現にあらはれ、作用の上にのみあらはれる。作用の斷絶せる所に過程はあらはれぬ。然らば相互作用の停止する場合に社會の存立も中止すると觀なくてはならぬ。社會はかゝる作用の上にのみ認められるものではなく、持續的の存立を保つものではないか。

(三)此説は社會の存立を心理的相互作用の形式に於て認め、社會化の諸精神内容は一切之を分離すると云ふのであるが、社會の存否

は此如き心理的形式のみに決定せられるのでなく、社會化を惹起する精神內容の上に、之を決定する重要なるものがあるのではないか。純社會的なるものは相互作用と云ふが如き心理的形式にあるのではなく、社會化をなす人々の持つ意味、內容にあるのではないか。

彼の社會學說に對しては色々の批評が加へられるのであるが、併し相互作用說は現代の社會學界に於て頗る重きをなして居る。それ故に最近に於ては此說に加へられる非難の點を修正して、之によりて現代の社會學的研究を助長せんとする傾向が次第にあらはれつゝある。卽ちジンメルの考を如何に修正する事によりて、社會學の研究が進められるかと云ふ事が、彼の以後の社會の主たる傾向となつて居る。

心的相互作用說に對して加へられる第一の非難は、結合化の過程が心的相互作用にあらはれると共に、反對の過程が亦此作用にあらはれる。然るに社會化は結合化であり、統一化であり、反對は社會化でない。故に此心的相互作用を以て社會に特有なるものと觀る事は出來ぬと云ふのである。之に對してジンメル自身は三樣の說明を與へて居る。其一は社會化は純一なる結合作用のみの上にあるのでなく、反對作用も亦社會化の過程となる。卽ち反對は結果として統一化を伴ふ。それ故に反對も亦社會化の過程であると云ふのであ

る。其二は人々の對人關係は結合化と非結合化との交錯である。反對の關係の中にも多少の程度に於て結合化の過程が觀られる。それ故に反對も亦社會化の過程であると云ふのである。而して其三は社會化は統一化であり、綜合化である。統一綜合は結合によるものと、反對によるものとある。反對も亦人々を結びつける故に統一化綜合化であり、從つてそれは社會化であると云ふのである。併しながら最初の說明は反對は結局結合に到る故に社會化であるで云ふのであり、それは結合と云ふ姿になる場合に社會化となると云ふのであり、反對作用自身が社會化である事を說明するものでない。次の說明は現實の對人關人に二つの方向が認められる事を說明するも、反對自身が結社過程である事を答へるものではない。ジンメルの相互作用說を徹底せしめんとせば第三の說明を取り、反對も亦統一化の過程であと云ふ解釋を下すより致方ない。それ故にジンメルの學派を繼承したと稱するウィーゼ (L. v. Wiese) は、其著『一般社會學』に於て、對人關係を考察するに結合關係と分離關係 (Zu= und Miteinander, Aus= und Ohneinander) との二つの範疇を立て、統一化に於て觀られる人間關係と分化に於て觀られる人間關係とを以て、社會關係の基本關係なりとなして居る。

併しながら茲に問題となるのは反對又は分化が對人關係でないと云ふのではなく、反對又は分化を含む相互作用が人間社會に本質的

なるものなりや否やと云ふ事である。吾々の内的の體驗よりせば、反對又は分化の過程にのみあらはれる人間關係を目して、それが社會をなして居るとはしない。社會は結合化の過程、親和的の作用の上にあると考へられる。ジンメルの社會學說が出る前に於て、テニィース (F. Tönnies) が、心的相互作用に相互肯定的のものと相互否定的のものとありとし、前者を以て意志の結合とし、此結合を以て社會としたのは、相互作用を結合過程の場合丈に限局して、之を以て社會に固有なるものと主張したものである。更に又フキーヤカントが相互作用を限定して、內的結合を豫想する相互作用の上に社會が認められるとなしたのは、反對作用も相互作用なるが故に社會化の過程なりと云はなくてはならぬ相互作用說を修正して、純反對作用を除いた心的相互作用を以て、社會に本質的なるものと認めんとしたものである。

次に心的相互作用說に對して加へられる第二の非難は社會を持續的存在とし、相互作用を斷續的過程と考へ、此兩者を同一視する事は出來ぬとするものである。ジンメルは明に社會を機能的存在とし、之を機能的存在と觀る事に於てのみ統一としての社會の存在が許されるとした。ウキーゼも亦ジンメルの此考を受けて社會は實體的存在でなく、起る所の事象であり、經過的事象に與へられたる名稱である。社會と云ふ名の下に何か實體的のものを求めんとして

も、それは結局不可能である。社會は動詞的概念であり、只だ社會化の過程があるのみであると述べて居る。併しながら社會を動詞的概念とする限り、過程の中止する所、作用の斷續する所に社會の連續的存在は認められない。然るに社會は此如き斷續的のもののみに限られず、持續性の大なる社會もある。ジンメル自身も社會には持續性の大なるものと小なるものとあると述べて居る。社會は持續的の存在であるが相互作用は斷續的である。ケルゼンは社會的構成物と稱せられるもの、例へば國家の如きものは持續的存在であり、個々人の心的過程の如き一時的、流動的作用の上にあるのではない。國家に固有なる存在の等質性と不可分性は、伸縮常なき波動の如き心的事象と兩立しないものであるとして、心的過程の上に社會の存立を認めんとする相互作用說を否定せんとして居る。

心的相互作用と云ふ斷續的の機能は、連續的存在としての社會の本質と相容れないものであると考へられるが、社會を機能的存在と見ながら、かゝる機能が行はれる機會 (Chance) のある所に社會關係の存立を認め、社會の存在を作用の上より狀態の中へ移したマックス・ウエバー (Max Weber) の所說は、相互作用說を修正する上に大なる效果あるものと考へられる。マックス・ウエーバの考によると、社會學は人々の社會的行爲の意味を了解し、其行爲の過程と作用とを根本的に說明する科學であると云ふ。かゝ意味に於て社會

學の取扱ふ所は人々の行爲であり、作用であると考へられ、社會は此如き行爲の上にあるものゝ如く解せられる。然るに彼は特定の意味內容を以て社會的に行爲せられる機會に於て、社會關係が存立すると述べ、社會關係は社會的構成物卽ち國家、敎團、婚姻等の上に認められるものであり、それはそれぞれの意味に從ひ、意味の向けられた方向に人々の行動が置かれる場合、置かれた場合、又は置かれるであらう場合の機會に於て存立するものであると云ふ。從つて彼の云ふ社會は根本的には社會的行爲の上に許されるものであるとしても、かゝる行爲が現實的に行はれて居る事を要しない、云はゞ行爲が潛在性を持つて居る社會關係の上に認められるものと考へられる。卽ち社會的行爲と云ふ斷續的の作用を以て社會とせず、かゝる作用の起る地盤たる社會關係を以て連續的存在としての社會となしたのである。彼は行爲と云ふ機能を社會學の研究主題とする立場を守りながら、之より社會關係と云ふ狀態の存在を導き出し、社會を此狀態の上に置かんとしたものである。

尙此點に關する心的相互作用說の修正說として高田保馬博士の「不定限なる接觸の用意」として觀られる結合說があるが、高田博士の考へは社會は結合の關係にある人的集團であるとし、一定關係にある人々の一團なりとして、社會を實體的のものと見做し、社會を機能的存在として見る立場とは著しく見地を異にするものと思はれ

る故に、所謂相互作用説とは少しく縁遠いものと思はれる。

最後に心的相互作用説に加へられる第三の非難は社會は精神内容としてあらはれるものであり、心的相互作用と云ふが如き外部的作用形式が其特有性となつて居るのではない、と云ふ事である。心的相互作用は人々が社會的統一を惹き起さんとする精神内容に伴ふ外部的作用に過ぎず、此如き外部的作用に社會の本質があるのではない。此如き外部的作用は消長常ならぬものであるが、社會は持續的な存立をなし、持續的に存立し得る人々の精神内容に基く存在である。外部的作用たる相互作用を惹起し、其根底に潜む精神内容こそ社會を社會たらしむるものである。卽ち人々の精神内容として持つ所の態度が社會を社會たらしむるものであり、相互作用の形式の如きは此態度の外部的發現形式に外ならないと考へられる。

社會をかく精神内容と觀る立場は頗る多い。テニィースが云ふ所の、本質意志又は選擇意志に基く結合と云ふ考へも、此立場にあるものであり、フキーヤカントが内部的に基礎づけられたる相互作用、又は内的結合を伴ふ相互作用と說く所の考へも、此立場にあるものと見られ、高田博士の「接觸の用意」と云ふ考も、此立場にあるものと考へられ、マックス・ウエバーの意味を持つた行動と云ふ考も、同樣の立場にあるものと觀られる。此等の人々は社會の特色を精神内容(感情的又は理知的慾求)に求める事は同じであるが、社會

を社會たらしむる精神內容は何であるかと云ふ點に關しては、各人各樣の說明を與へて居る。此等種々の說明の內、マックス・ウェバーのそれは、社會をなす精神內容を最も廣義に解して居ると觀られる。彼の云ふ社會的行爲とは行爲者の思ふ所の意味に從つて他の人々の態度に關係せしめられ、其主觀的の意味の方向へ向けられたる行爲である。卽ち行爲者の持つ所の意味が社會的行爲を決定するものであり、此意味のない行爲、又意味を持つて居ても此意味に從つて他の人々へ向けられない行爲は、社會的行爲ではないと云ふ事になる。行爲者の思ふ意味に從つて行爲が起り、其意味に從つて他の人の態度に行爲が向けられる場合に、社會的行爲あり、此意味に從つて行はれる行爲が相互的に起る機會のある所に、社會關係ありと云ふのである。從つて社會的行爲も、社會關係も精神內容たる意味に基くものであり、意味を離れた形式に基くものではない。かゝる意味の形には、彼の考によると、事實上現實的にある行爲者によつて思はれる意味、事實上與へられた一群の人々(行爲者)に見出される平均的又は近似的意味、及び槪念的に構成せられた類型に於て、類型として考へられたる行爲者の持つ意味等三種のものがあり得るが、何れにしても此等の意味に從つて對人行爲が起る場合にそれが社會的行爲となると云ふ。之によつて觀ると、マックス・ウェバーの云ふ社會的行爲とは之を惹き起す意味に於て存立するものであ

り、かゝる行爲發現の機會に於て認められる社會關係も亦此意味に於て其存立が許されて居ると觀られる。從つて社會は行爲者の持つ意味、卽ち精神內容を離れて存立が許されぬとするものである。



昭和三年四月二十日印刷
昭和三年四月廿五日發行

不許複製

社會學講義案

正價金壹圓

著作者　戸田貞三

發行兼印刷者　入坂淺次郎
京都市丸太町寺町東

印刷所　弘文堂印刷部
京都市東川通川端東

發行所　弘文堂書房
京都市丸太町寺町東
振替大阪一七〇五番

發賣元　弘文堂東京店
東京市神田淡路町二
振替東京五三九〇九

戸田貞三著 家族の研究 二・一五〇
長谷川如是閑著 現代國家批判 三・五〇 一八〇
同 著 現代社會批判 三・〇〇 一八〇
戸田海市著 社會政策論 四・五〇 二七〇
同 著 工業經濟論 五・五〇 二七〇
同 著 商業經濟論 五・五〇 二七〇
同 著 特殊問題研究 五・〇〇 二七〇
神戸正雄著 日本國際經濟論 一・七〇 一八〇
同 著 經濟學要論 四・〇〇 二七〇
同 著 財政學要論 四・〇〇 二七〇
同 著 最近經濟及社會問題協調的解釋 一・七〇 一八〇
河田嗣郎著 農業社會と組合主義 二・八〇 二七〇
同 著 家族制度の研究 三・二〇 二七〇
同 著 食糧と社會 二・五〇 一八〇
同 著 何處へ往く 三・〇〇 一八〇
同 著 農村研究 四・〇〇 二七〇
同 著 經濟學要義 五・〇〇 二七〇
同 著 農業倉庫論 二・九〇 二七〇
河田嗣郎著 農業社會化運動 一・八〇 一八〇
河上肇著 マルクス資本論略解（資本蓄積論） 二・五〇 一八〇
森耕二郎著 勞賃學說の史的發展 四・〇〇 三六〇
岡村司著 民法と社會主義 三・〇〇 一八〇
土屋喬雄著 封建社會崩壞過程の研究 四・五〇 三六〇
米田庄太郎著 輓近社會思想の研究 二・五〇 一八〇
同 著 革命的サンディカリズムの研究 三・五〇 一八〇
同 著 米國I・W・Wの研究 二・九〇 一八〇
關一著 住宅問題と都市計畫 三・八〇 二七〇
牧山正彦譯 ベーベル著 婦人と社會主義（全五冊） 五・六〇 二七〇
本庄榮治郎著 經濟史研究 五・五〇 二七〇
同 著 德川幕府の米價調節 四・五〇 二七〇
山本美越乃著 改訂植民政策研究 六・〇〇 二七〇
森戸辰男譯 アントン・メンガア著 全勞働收益權史論 三・五〇 一八〇
伊藤眞雄譯 キヤナン著 富 二・五〇 一八〇
谷口吉彥譯 マルサス著 人口論 二・五〇 一八〇
堀經夫著 經濟と自由 二・〇〇 一八〇

318
156

終